
普通だけど異常で過負荷な俺

牛先輩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

普通だけど異常で過負荷な俺

【Nコード】

N2602X

【作者名】

牛先輩

【あらすじ】

めだかボックス好きの高校生白水弓彦しみづゆみひこはある日めだかボックスを読んでこう思った。

「寝て起きたらめだかボックスの世界へ行きたい」

そう思い寝て起きたらそこはなにかが違ったそこは……………

めだかボックスの世界だった

その世界に迷い込んだ彼の運命は！！！？

タイトル変更しました

第1話 「入っちゃったあ！！！！？」（前書き）

どーも牛先輩です！流星のロックマンの方を読nder人はすみませ
ん！

どーかこの勝手に文章力無くて原作クラッシャー（？）な作者の作
品ですが

読んでください

第1話 「入っちゃったあ!!!?」

日曜日の夜12時

学校に行くのがだるくなってきた高校一年生で〜す♪

そんな俺の楽しみは毎週月曜（又は二ヶ月に一回）に訪れる・・・

そう!!!ジャンプだ!!!週刊少年ジャンプだ!!!

そしてその中に載っているマンガ・・・・・・・・で一番なのは

めだかボックス!!!!!!やつぱりめだかは最高だぜ!

ちなみにそんな俺の名前は白水弓彦しるしゆきゆづりだぜ

まっそんな俺はめだかボックス4巻を読んだ

そのときの俺の感想は「寝て起きたら最強?すげえっすね(笑)」で

「俺は寝て起きたらめだかボックスの世界へ行きたいよ」なんて軽く考え

『まあいいや寝よ・・・・』

そして俺は寝た・・・・・・・・そして起きると

なんか・・・・いつもと違った

まず制服が違う

この制服は・・・

箱庭学園のだ

[illegible]

考えろ！考えろ！！俺にコスプレ趣味は無い！！！！！！

あれ？よく考えたら・・・

これ・・・俺が・・・めだかボックスの世界に

入っちゃったあ！！！！？

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

フッフッフいいだろう！
なりきってやろう！

よくわからんがめだかボツクスの世界に入れたんだ
めだかボツクスの世界に似合うキャラになってやる！！！！
特に不知火みたいなキャラに！！！！

そんなわけで俺の波乱万丈の高校生活が再開する

第1話 「入っちゃったあ!!!?」 (後書き)

どうでしたか？

流星のロックマンと少し書き方が違うので苦戦しました
感想待ってます！

主人公紹介（前書き）

スキル考えすぎかな？

一応ネタバレにならないようにスキルの名前だけにしときます
というか半分くらい名前しか浮かんでないんですが
スキルは増え続けます

主人公紹介

名前 白水弓彦 しろくすいゆみひこ

年齢 15

性別 男

特徴 白髪で球磨川のような顔立ち

血液型 A B 型

癖 誰にでも「ちゃん」をつける

異常

「冷たい心」マインドクール 不明

「熱い心」マインドヒート 不明

「暴力以上の暴力」バイオレンスナックル 不明

「無歩」ノーフラン 不明

「疲れ知らず」アスリート 不明

「半身半技」ハートインクリス 不明

「言霊の幸ふ人々」ことだまのさきはうひとびと 不明

過負荷

「ハカイ日常的な破壊」不明

「リヴァー唯々諾々」不明

「ダウンアップ内弁慶の外地蔵」不明

主人公紹介（後書き）

それにしてもスキル名厨二つぽい・・・

第2話 「Letプライバシー!!!」 (前書き)

新しく始めるやつは話がぼんぼん浮かぶなあゝ

第2話 「Letプライバシー!!!」

俺は今箱庭学園に向かっている

え？道分かるかって？わかるわけねえだろ（怒）

ちなみに今は5月の後半っばい

俺はおそらく転校生として入れるだろう

たぶん……

そんな訳で学校に……

着いちゃいました！

え？どうやって着いたかって？

だってこの学校広いんだぜ？

こんなマンモス校見つけれないほうが難しいって……

と・こ・ろ・で俺のクラスはどこだ？

どうしよう……

「人吉く〜ん今日こそおごって——」「やるか!」「」

こ、このあどけない声は!!!!

し、し、し、不知火!!!!!!!!!!と・善吉

「ん？今あたしのこと呼んだのあんた？」

「え！？そんなバカな！！なぜ俺の心の声が！？」

「知らない」

「あ、悪いなこいつなんか心読めるっぽいから」

「Letプライバシー!!!」

「あひやひや」

「転校生？」

うん（恐らく）

「へへへ、そなんだ」

「……なんですか？なんなんですか？不知火先生？」

ここになんか2巻のあそこに似てるな・・・

「べつにつくおじいちゃんに聞いてあげようかって考えてるだけだよん」

「おじいちゃん？」

あゝあの袖ちゃんって呼んでたじいさんか

「そうそうそれそれ♪」

「心を読むなあ——！！！」

「で？名前は何？」

「しろみゆ彦」
『白水弓彦』

「つか不知火・・・」

人と話すときくらい飯食うのやめてくれ・・・

文章だからわからないけど今も不知火は飯を食ってます

「わかったよ」

『で、どこ？』

「なにを？」

『はい？』

「なにをおごってくれるの？」

ピキッ

そのとき俺の中の時間が止まった

3秒後

『じゃあせ。ンイレ。ンの』

「売ってる食品全部ね」

は？

再び俺の中の時間が止まった

数分後やっと俺は財布が殉職しない程度に説得した

不知火が電話（メール？）してる間は善吉と話している

「お疲れ・・・あ、俺は人吉善吉だ、よろしくな」

『よろしくよろしく』

「・・・なんで俺への興味はゼロなんだ？」

『俺の男への興味は女子に比べたらゼロに等しいからね』

「ほう（怒）」

『冗談冗談』』

「わかったよ」

『で・・・何組？』

「一組だよ」

『一組・・・（ノーマル普通か）』

「じゃあ同じクラスだな」

「よろしくねえ」と・こ・ろ・で」

「ん？どうした？」

なぜ息が合ったのだろうか・・・

「今日のあのお嬢様の就任式だよ」

「あっ」

就任式？

「やべっ！急ぐぞ！！」

「えゝ走るの？」

「たりめーだ！」

「おんぶは？」

「するか！！！！」

本当仲良すぎて気持ち悪いな・・・

そして体育館

第2話 「Letプライバシー!!!」 (後書き)

不知火のおんぶ要求は

1巻の「走るの嫌い」ってところから思いついたネタです

第3話 「無視しよう!」

『世界は平凡か？

未来は退屈か？

現実 is 適当か？』

んゝほとんどあつてゐるね

どうも皆！ラジオ体操はやらないではんこだけ押す
白水弓彦しるこゆみひこだよ！

さて今の続きをどうぞ！

『安心しろそれでも

生きること is 劇的だ!』

そんなのはきれいごとだ!・・・って言う人もいるかもね♪
あ！俺のこと無視していいからね

『そんなわけで本日より私が貴様たちの生徒会長だ

学業・恋愛・家庭・労働・私生活にいたるまで

悩み事があれば迷わず目安箱に投書するがよい

24時間365日

私は誰からの相談でも受け付ける!!』

まさに大言壮語・・・って奴かな？

凄いこといっちゃうね

少し時間は飛び 一年一組

「しっかしあのお嬢様

全校生徒を前によくあんな啖呵が切れるもんだよ

人前に立つのに慣れてるつつかさー」

「カツ！ありやあ人の前に立つのに慣れてんじゃねーよ人の上に立つのに慣れてんだ！」

作者的にめんどいがキャラ紹介

人吉善吉 所属一年一組 利き腕左 血液型A B型 星座しし座

「んゝあー、そりやそーだね、そーでなきゃ一年生で生徒会長になんかなれっこないか」

不知火半袖 所属一年一組 血液型A B型 視力左右ともに1 / 5

『どんなどんな？』

「うおっ！いつからいたんだよ！転校生！！」

『どやっ』

「どや顔すんな！！」

『で？お嬢様とか生徒会長とかって何？』

「じゃあ説明してやれ不知火」

「あいあいさ」

全国模試では常に上位をキープ！

偏差値は常識知らずの90を記録し！

手にした賞状やトロフィーは数知れず！

スポーツにおいてもあらゆる記録を総なめ状態！

実家は世界経済を担う冗談みたいなお金持ち！

全長263・0メートル

高度6万フィートをマッハ2で飛行！

インテル入ってる！」

「いや途中から人類じゃなくなってる」

『ほうほうそれで《ジョニー》はどうなったんだ？』

「え〜とね〜」

「ジョニーって誰だ！？」

「で？理解できた？白水」

『おいおい袖ちゃん名字呼びはねーだろ〜せっかくだしヒコザ。って呼んでよ』

「やだ」

「ポケ○ン！？」

今そこにツッコむか・・・

『じゃあ彦でそれかヒコで』

「OK」

普通だな・・・本当に気分屋だな・・・

『ところで善吉ちゃんが入るの？生徒会』

「カツ！入ってたまるか！あとちゃん付けんな」

・・・善吉ちゃんの後ろに生徒会長黒神めだかがいる

・・・よし！

無視！！！！！！

『なんでちゃん付けだめなの？』

「それは・・・」

ま、どーせあいつのことだろうな・・・あの負の・・・ん？
マイナス

ゴゴゴゴゴゴゴゴ

って聞こえるような・・・

「そうか貴様らは私を無視すると・・・ならば！私も貴様らの意見とやらを無視しようか！！」

『「え？」』

ガシッ

あれ？この人こんな性格だっ――

『「ギヤアアアアアアア」』

第4話 「逃げる！！！」 (前書き)

今回からたまにあらすじを書こうと思います

あらすじ「拉致られた」

ちなみに主人公がいないときはナレーションでお送りします

第4話 「逃げる!!!」

「あれ？人吉と転校生どこ行っただ？」

「んー人吉達はね？さっきこわーい生徒会長さんに連れてかれちゃっただよん」

今不知火に話しかけたのは日向・・・・・・・・日向とは
・・・・・・・・確か善吉のクラスメイトの・・・・・・メガネ？だ

「そーいやなんか選挙活動も
手伝ってみたいだけど人吉と例の新会長って
どついう関係なんだ？」

「あーいわゆるひとつの幼なじみって奴ですよ

ま、あたしに言わせりゃただの腐れ縁なんだけどね」

生徒会室

「・・・・・・たく普通に連れてくるってことができねーのかよ、生徒
会長さん」

『いや連れてくるっていうか今の拉致「ふんふん私の誘いを」聞け
！！』

黒神めだか 所属一年十三組 血液型AB型

「それとよそよそしい呼び方をするものではないぞ昔のようにめだ

「かちゃんと呼ぶがよい！」

凜っ！！

役職 生徒会長

「うわぁー本当に凜っ！！って出てる？（聞こえる？）」

「カツ！そりゃキツイのはわかるけどな！だからって俺を巻きこむなよ！」

俺も巻き込まれた………
っていうかあれ？2人とも俺無視して話すすめてない？

……よしっ！！2人で話してる間に……

逃げる！！！！

ダッ！ガシッ

あれ？歩けないぞ？というか足浮かんでない？
よし！も一回見よ

チラッ

足浮いてました。

「おい貴様いつまでとばけている」

『いやだって普通体重60Kgはあるであろう高1男子の服の襟を

つかんで宙に浮かせるとか高1女子のパワーじゃありませんよ」

「む、そうか？」

（すいぶん説明口調だな）

本当に自分が異常だてんさいって気づいてないんだね・・・

『ていうか早く降ろしてください』

「ん？すまん」

ドサッ ゴンッ 『ぶっ！！』

痛い！・・・あれ？精一杯痛がつてるのに
無視！？え？なんで痛がつてるかって？

・・・なんでだろ・・・

そのままごちゃごちゃ話して・・・

剣道場にて

第5話 「グッバイ・俺」(前書き)

なんだ！このサブタイトル！！！？

あらすじ「めだかと呼べ呼んで呼ぶがよい」

第5話 「グッバイ・俺」

バンッ

えー今の音は生徒会長様が剣道場（不良のたまり場）の扉を開けて

バンッ

って感じです

おっと！紹介が遅れたね俺はバカの悪魔！

バカシファ——バキッ！

『ひでーよ善吉ちゃん・・・』

「うるせえ！ハ〇ルの動く城じゃねーんだぞ！」

『大丈夫だよ今のじゃわかる人少ないから』

「おい誰だお前ら」

「一年十三組生徒会執行部会長職

黒神めだかだ

目安箱の投書に基づき生徒会を執行する！」

「あー聞いてんぜ今をときめくイカれた新会長って奴だろ？」

うわっ！負けフラグ早速立ってる——

お？なんかリーダーみたいな人（名前？知らんな）が

会長さんに木刀向けてるよ

「貴様がリーダーの門司三年生だな、剣道か懐かしいぞ、私も昔少

しだけかじったよ」

にしても上級生になぜ敬語を使わないんだろろろん？・・あれ？

「この木刀もよく手入れされておる、黒檀とは随分張り込んだものだ」

あれ？なんか会長さんの手にいつの間にか門司（文字？）先輩の木刀が

『善吉ちゃん何が起こったの？どんな技？』

「無刀取りだ技っつーかフツーに奥義なんだけど」

『へへそっか』

無刀取りかゝ知ってたけど忘れてたぜ

ん？おっ！そろそろあれか？

ズ タタタタタタタタ

キター分身の術ー会長さんが分身して走ってそして気づいたら扇子の上には

「——それでも煙草だけは控えておけ」

煙草が————

「貴様達の健全な——」

『煙草のせいで体悪くしても知らんぞ————』

「ふむ最後まで言わせて欲しかったがまあそんなとこだな、しかしまあ荒れ放題だな、よくもここまで学園施設を荒廃させたものだ、逆に感心したくなる」

お？来る？来る？あれが

「哀れなことだ」

「?」 「!」

キタ

「貴様達もかつては真っ直ぐな剣道少年だったに決まっている、何か重大な理由があって挫折を経験し、道を踏み外してしまったとしたか考えられん」

これが黒神めだかの真骨頂

「上から目線性善説」なのだ

その後

素振り1000回をやらされ

先輩達の悲鳴が剣道場に木霊する

「助けてくれ！」

嗚呼聞こえない聞こえない

「なにをぼーっとしてる貴様……」

↖
^
?
↙

「貴様のやるのだ！！」

『なぜ!?!』

「いいからやるのだ!?!」

『ギッ

ギヤアアアアアアアアアア』

グッバイ・・俺

第6話 「人の〇〇奪っ」として（前書き）

あらすじ「ご臨終です俺・・・」

さてようやく原作の1話目が終わりそう

第6話 「人の〇〇奪つといて」

剣道場の件の翌日、食堂

「彦はともかくさ、人吉ってひょっとして頭悪くない？なんで毎回お嬢様のシゴキに付き合ってるんだよ、部外者のくせに」

「うるせえ」

『そうだぜ袖ちゃんの言う通りだぜ善吉ちゃん』

やあ！前回死にかけて、ある先生に心配（？）された白水弓彦しるしみづゆみひこだよ

「お前も巻き込まれただろうが！（怒）」

『ちっちゃいことは気にすんなよ』

まっ安心しなよ善吉ちゃん』

「は？」

「あれ？知らないの？今日の放課後役員募集すんだよ？二、三年生の特待生集めてね」

まっこの先展開知ってるけどね

にしても飯食ったら眠・・・

そういえばさつき後ろからなんか声聞こえたような

たしか・・・あれ・・・日向か・・・まあいよいよ教室帰って寝よ

Z Z Z Z Z Z Z Z

剣道場

「ったくよく高校じゃいい子ちゃんに通しかつただけだよ」

そこには倒れた不良と日向そして倒れた善吉センバイがいた

「だ・・・誰だお前・・・？」

「僕？僕は真面目な一年生ですよ、真面目に剣道がしたい真面目（ガラツ）遅れたーーーー！！」あ？てめ転校生か？」

あれ？日向？なんで？まさか・・・

「おらあーーーーー！！」

ぎゃあああああなんかいきなり襲いかかってきたーーーー！！！！

ガツシツ

「！？ひつ・・・人吉！」

「無刀取りとムリつと・・・たりめーか」

「へっ・・・やっぱお前は妨が『助かったよ』善吉ちゃん」

「ええいよるな！！ったく何しに来てんだ？」

『いや・・・あの・・・剣道場が気になって・・・（嘘）』

まあ本当は夢を見てたら寝過ごして遅れたんだけど
と！いうわけで回想に入るぜ！

く回想く

あれ？ここは教室？

『あれ？俺寝たよな？』

「うん寝たよ」

そこには箱庭学園とは違った制服を着た女のこがい・・・この人
「あれ？僕を知ってるの？」

『どうもこんにちわ安心院なじみさん』

「どうして僕のこと知ってるかは聞かないけど、僕の事は安心院さ
んと呼びなさい」

『ガチで言うんですねそれ』

「さて言いたい事がたくさんあるけどまずは・・・」

すると安心院あんしんいんさんが・・・
なんか一歩一歩近づいてくる

『なにするんですか？（汗）』

「ん？なにって」

『ま、まさか・・・』

『あのスキル』を使う気じゃ・・・

（10分後）

『・・・・・・・・・・・』

「いつまで落ち込むんだい？」

「めだかボックス」の読者の皆さんならわかるだろう俺のされたとを

「まったく僕は口^{リップサービス}写しを使ったただだよ」

「初めてですよ女の子に殺意持ったの」

「君はどう見ても女の子大好きだろう？ だったらある意味勝ちじゃないか」

「いくらなんでも無理矢理はいやですよ（泣）」

なんかどんどんいやなことが暴露されていくような感じが

ん？ あれ？ よく考えたら口^{リップサービス}写しってことは

「うんスキルを一個あげたよまあそれでイーブンだろ？」

「まあそうっすね・・・じゃあ何をくれたんですか？」

「スキルを数えるスキルさ」

「・・・はあ？」

「ああごめんごめん正確にはスキルを把握するスキルさ」

「ひ・・・キ・・・それ・・・」

「？ どうしたんだい？」

「人のファーストキス奪つといてそれだけかぁーーーーー」

「大丈夫かい？ 一応隠してたのに暴露してるよ？ それにモノローグ忘れてるよ？」

「あっ！」

「まあ貸してあげたから」

『?そんなスキル持つてなきゃ意味が——!!!!?』

「やっと実感わいたかい?」

『え?嘘オ・・・』

く回想終わりく

いやあゝ思い出すと嫌な感じだな

あれ?なんか日向が善吉ちゃんを木刀で叩こうとしてる!?
よーしさつそく『アレ』を試すか!

ちなみにここまでの思考時間30秒(回想含め)

スキル!「バイオレンスナックル暴力以上の暴力」!!

これは自分に暴力的な強さを与えるスキルだ!

「どいつもこいつも面倒くせえ!お前!剣道三倍段って知ってっ—」

——」

ゴッ グワッシャー——ンッ

『「知るかつ!」』

善吉ちゃんと俺で日向をぶん殴り

日向は何メートルか吹き飛ば

ん?ずいぶん吹き飛んだな

やりすぎたかな?

なんか横で善吉ちゃんが驚いてるし

・・・・・・・・無視しよう!!!

数日後剣道部（仮）をまとめる日向の姿と
生徒会に入った善吉ちゃんの姿があった

第6話 「人の〇〇奪つといて」(後書き)

まあ主人公が落ち込むのもわからなくもないな
にしてもそこらへんのくだり書いててなんか恥ずしいな

第7話 「ナルシスト!？」（前書き）

あらずじ「俺のファーストキスが……」

前回の主人公へ

「どんまい!!!!」

第7話 「ナルシスト!？」

やあ！前回チートババアにファーストキスを奪われた白水弓彦しろみづゆみひだよ！

善吉ちゃんが生徒会に入って一週間が経った

そんなわけで放課後に生徒会に遊びに来ました

ん？あれ善吉ちゃんが鏡で自分の姿を見てる!？

まさか善吉ちゃんは・・・『ナルシスト!？』

「ちげえーよ!!!」

『グハッ』

蹴られた!!ひでえよ善吉ちゃん！

「あ、わりー」

「ま、いいやどしたの？」

「いや俺黒い制服似合わねえじゃん？」

「いや善吉には黒がよく似合う」

いつの間にか俺達の後ろで善吉ちゃんと同じポーズを取ってる会長さんがいた

「どうわっ！だからお前は——」

『いつからいたんですか！会長さん!』

「見てくれが気になるなら内側にジャージでも着たらどうだ？」

「？何をバカな事を・・・」

とか言いながらやるんだよね

「ってうわなんだコレ！？デッ、デビルかけえ！！」

善吉ちゃん……センス？

・
・
・
・
眠いな
・
・
・
・
・
・

あーでもなー寝るとあいつが

一週間前夜 自宅にて

「眠い……よし！寝よう！ZZZZZZZZZZ」

いじじい.....

え！？また教室！！！？

まさかまた・
・
・

「その通り僕だよ白水君」

『どーも安心院さん』

「僕のことは親しみを込めて安心院さんと呼びなさい」
あんしんいん

あんしんいん
安心院って呼ばないと何回も言う気かよこのチートババア

「誰がチートババアだい？」

あれ？なんで聞こえたの？モノローグだよ

「なーに僕の「雑音拾い」というささやかな能力のおかげさ」

あ！じゃあ話す必要ないじゃん！！

「まあそうだけど無視されてるみたいだからやめてくれる？」

『へーい』

「さて！なんで僕が君の夢の中にいるのでしょうか？」

『・・・まさか・・・』

「わかったかい？」

『俺のセカンドキスを奪おうと――』

「違うね」

よかった！セカンドは守らんと

「ファースト奪われた時点で君負けてるようなもんだけどね」

『・・・・・・』

「さて本題に入ろうか」

『・・・・・・』

「返事しないとセカンドも奪うよ？」

『はいすいません！安心院^{あんしんいん}さん！』

このキス魔が！って思いたいけどやめとこつ

「それじゃあ本題だ・・・君は何者だい？」

『は？』

「は？じゃないよ」

『んなこと言われても俺・・・』

「じゃあなんでスキルを持つてるんだい？」

『え、あれ安心院あんしんいんさんがくれたんじゃ』

「違うよ、僕はスキルを把握するスキル」マニュアル「辞書」をあげただけだよ」
『じゃああれって』

「うん君の持つてるスキルだね、しかもスキルはあれだけじゃない
し確かに自分の能力スキルに気づかない人も多いけど君はおかしい！！！」

『・・・・・・』

「おや？どうしたんだい？」

『いや誰もいないとは言えいきなり君はおかしい言われたら傷つく
わ！！！！』

「そうかいごめんごめん」

コイツ（怒）

さて！この後もコイツ・・・安心院あんしんいんさんがイラつかせてくるので時間
を飛ばそう！

第7話 「ナルシスト!？」（後書き）

よく見たら主人公紹介に「辞書」^{マニキュアル}書くの忘れてた！

第8話 「やな目覚めだ」(前書き)

今更ですがめだかボックスアニメ化だぁー！

確かこの小説始めて数時間後にこのこと知ったんだよね

あんとき声と言っていいのかわからない声出そうになったし・・・

あらずじ「善吉ちゃんのセンス(笑)」

第8話 「やな目覚めだ」

『で・・・なんで俺がスキル持つてるかすか?』

「そうだね」

『えーと・・・・・・・・・・・・・・・・』

「わからないんだったら素直にいいなよ?」

『はい・・・・』

いいかげん心読むのやめてくれないかな・・・・

「つまり君は何故スキルを持つてかは知らないと・・・・」

『はい・・・まあそうですね』

「フッフ面白いなあ」

はい?

「だって君は僕を知つてて
スキルを何個も持つてて

しかしスキルを持つてる自覚が無くて

だが僕のスキル「辞書」^{スキル}を使いこなし

しかし「能力」という単語を理解してる

これは面白いよ・・・悪平等^{ぼく}に入りたいぐらいだ」

『はあ・・・・』

「?どうしたんだい?」

『言う事が多くて萎えてきたんです』

「そうかいそうかい（笑）」

チートとわかっててもぶん殴りた——バキッ

痛い……まさかリアットが来るとは……

「それで？どうなんだい？」

『え〜と安心院あんしんいんさんのスキルを使いこなせたのはマグレで「能力スキル」
のこと知ってたのは……あの〜その〜』

「どうしたんだい？」

『あの〜なぜか知ってたでいいですか？』

「納得いかないね」

『ですよ〜』

その時いきなり周りの景色が崩れていく

「おや？もう時間だね」

時間で………

「君がそろそろ起きる頃ってことさ、本当はまだ聞きたいことがあるけど、まあいいやそれは今度で

………あっ僕は君が深い眠りについたら来るからね
じゃー！」

そう言って安心院あんしんいんさんが手を振ると

目の前の景色も崩れ目の前が真っ暗になった
そして

ガバッ

起きました……

やな目覚めだ……

まあそんなこんなで俺が深い眠りにつくと

決まってあいつが現れ「おい！彦！彦！」ん？この声は

『どしたの？善吉ちゃん』

「どしたのじゃねーよ！ずっとボーっとしてっから
どうしたかと思っただぞ！」

『そいつは失礼、あ、そういえば目安箱に投書あったの？』

「ん？ああ、あったぜえーとめだかちゃん誰だっけ？」

「有明二年生だ」

「そうそう陸上部の先輩だ」

『そっか』

じゃあ今は二話目か……

く放課後く

「あのごめんなさい本当はこんな事下級生のあなた達に相談するよ
うなことじゃないかもしれないんだけど」

「遠慮はいらん構えるな

私は誰の相談でも受けつける！」

（なんでこいつ上級生に敬語使わないんだろう・・・）

（善吉ちゃんのセンスはどうなってんだろっ）

（なんでこのコ生徒会役員じゃないのにここにいるんだろう）

「それで相談っていうのはこのことなんだけど・・・」

有明先輩はボロボロのスパイクと

「リクジよう部やめ口」と書かれた紙を出す

「・・・酷いな」

『確か有明先輩って短距離走の代表に選ばれたんですね？』

「え・・・うん・・・なんで知ってるの？」

『え！？いや別に！遠くからずーっと見守ったりとか尾けたりして
ませんよ！ー！』

「・・・」

あれ？引いてる？ここはとりあえず

『冗談です』

「はあ・・・」

『で、このスパイクはいつこんな状態になったんですか？』

「えつと三日前」

「・・・犯人の心当たりは？」

「わかんない、スパイクなんて更衣室に置きっぱなしだし、誰にでもできるし、てゆーか、みんな怪しいし！」

「・・・安心しろ有明二年生この黒神めだが今日中に犯人を突き止めてやる!!」

『「えっ!!?」』

第8話 「やな目覚めだ」(後書き)

にしても流星のロックマンやってた頃とは
ずいぶんアクセス数が違うな・・・

第9話 「人を信じる事を」 (前書き)

今日のジャンプのめだかボックスすごかったな・・・
にしてもなんか上手くかけない・・・

あらすじ「おはようございまーす」

第9話 「人を信じる事を」

『それで会長さんどうやって探すんですか？』

「実に簡単だ

『陸上部女子』で『陸上歴はそれなりに長く』

『短距離走を専門』とし『有明二年生と同種シューズを愛用』

『左きき』で『文車新聞を購読』し『23地区ブロックに住んでいる』

——誰かだ」

「はあ？なんだそりゃ」

『????????あつ！』

「この靴は『もしもし？袖ちゃん？俺俺、彦』……………」

ガンッ

『いでっ！なにすんだ！？善吉ちゃん！』

「うるせー！」

《あひゃひゃ、よくわかんないけど楽しそうだねっ》

（数分後）

「陸上部所属三年九組諫早先輩、有明先輩と同じ短距離走を専門とするアスリートで、利き腕は左同じスパイクを履いてるのは見てのとおり、お住まいは23地区ブロックで3年前から文車新聞を購読中——だつてさ」

はあーい遅れたけど前回チートババアにラリアットをくらったり
善吉ちゃんにも蹴られた白水弓彦しみずゆみひこだよ！

さて現在の状況は有明先輩のスパイクボロ口事件（今適当に考えたZE）

で会長さんが推理に当てはまる人物を探すために袖ちゃんを頼ったって感じたZE

ちなみに袖ちゃんに頼ったって伝えたときの会長さんの顔はすっげえー嫌そうにしてたな

あ！言い忘れてた、今は陸上グラウンドだよ

「いやおせえよ」

『善吉ちゃん・・・モノローグにつっこまないで』

「あひやひや、なんで現在の状況伝えてるのに
現在地伝えるの忘れるとかバカでしょ」

『袖ちゃん・・・的確なツツコミ&心の折りかたナイスです』

「大丈夫か？涙目だぞ・・・」

「あひやひやそんな事より」

え！？人が泣きそうになつてんのにそんな事！！？

「あの諫早先輩有明先輩が代表に選ばれたせいでレギュラー落ちしてます」

「・・・そりゃ決まりだな」

この2人完全に俺のこと無視してるよね
うん殴っていいかな？

ん？あれ？いつの間に会長さんいたの？

「実質的な証拠はまだ何もないのだほとんどという言葉の意味は——
ん？ 貴様はなぜ泣きそうになってる？」

『いや・・・あの人生につか——なんでもありません！』

「人生に疲れた」って言おうとしたけどこの人に言うともんどいだろうし

『さて話を戻しましょう』

「ふむ、そうか、状況証拠だけで犯人と決め付けるのはよくないな」

「上から目線性善説もいーけどさ」

『警察じゃあるまいし物的証拠なんて集めようが・・・
なんで袖ちゃんはわくわくしてるの？』

「楽しそうだから」

まあ会長さんは・・・本人に直接聞くような人じゃあ・・・

「諫早三年生貴様が犯人か？」

「！！！」

あるんだよね

にしてもなんで手にスパイクはめてんだろ・・・

善吉ちゃんのズッコケ見事だし

袖ちゃん大爆笑だしつか・・・俺も笑うのこらえるの限界——

「しっ知らないっ！！」

『「あつ逃げた！」』

なんか袖ちゃんと俺の声が被った

「いやまあそりゃ逃げるだろ追うぞ!」

「ところで人吉!」

「あ!？」

「なんで制服の下にジャージ来てるの?ヘンだよ?」

「今聞くことか!？」

いや善吉ちゃん・・・袖ちゃんの言うことは正しいZE

まあいいや、追いかけるか、この前見つけた

「アスリート
バートインクリス疲れ知らず」と「半身半技」があれば

追いつくぐらい簡単だろう

『さて行くか!善吉ちゃんと袖ちゃんは・・・こないよね』

「うん帰る」

「早く追うぞ!」

『OK!』

そして俺達が追いつくと

「諫早三年生!貴様が犯人か!？」

「ちっ違う違う知らないってあたしそんなの!、有明さんのスパイクにハサミなんて入れてないし!、「陸上部やめろ」なんて手紙も出してないし・・・」

（ああああああ何言ってるのよあたし!、聞かれてもないこと自分からわざわざ・・・!!）

「・・・そうか知らないというか・・・」

『ふー追いついた！ん？ここは確か……』

「知らないのならばそれでよいのだ、練習の邪魔をして悪かったな」

「………え？あ、あのちよつと……」

「？どうした何か用か？」

「い、いやそうじゃなくて……」

「ああ、そうそう言い忘れていた、さっきは本当にいい走りであったぞ、貴様の普段からの鍛錬の程がうかがえる、その調子で精進し続けるがよい！私は頑張る人間が大好きなのだ！」

「な……なんなのあのコ、わけわかんない、人を疑うってことを知らないの？」

「違いますよ諫早先輩、めだかちゃんは人を疑うことを知らないんじゃない

人を信じる事を知ってるんだ……！」

善吉ちゃん決まったあ……！！

「……きみは……きみはどうして制服の下にジャージを着てるの？へんよ」

「カッコイイって言え……！」

『ま、今回は見逃すって感じでしょ？善吉ちゃん』

「まあそんな感じですよあんたはもう二度とあんなことしねえって信じといてやる」

そのまま俺達は歩き・・・去っていった

〽翌日 生徒会室〽

「くっそーこのカツコよさがどうして伝わらねーかなあ」

『諦めるよ善吉ちゃん・・・・・・・・・・』

「あの人吉くんちよつといいかな？カツコイイよそれも個性的で」

「あつ有明先輩！」

善吉ちゃんジャージ隠したなフォローされたのに
・・・・あつ！そういえば今日俺日直じゃん！

忘れてたー！

まあ話の結末知ってるから別にいいし
その時俺は呼び止められた

「待て貴様・・・・・・・・いや白水同級生！」

！！！！？黒神めだか！？

第9話 「人を信じる事を」(後書き)

今回長・・・・・・・・2000文字越えて・・・・・・・・

第10話 「記憶があつた」(前書き)

あらずじ「日直ってどんな仕事やんだっけ？」

今回結構短めです

やっぱオリジナル話は上手く書けない・・・

第10話 「記憶があった」

『何のようですか？会長さん・・・』

「うむ貴様に聞きたいことがあつてな」

『ええ、俺にすべらない話とかないっすよ？』

「そのような事を聞く気はないのだがな」

だろうね・・・・・・・・・・

『じゃあ何をですか？俺日直の仕事あるんすけど』

「ふむ、じゃあ手短にしよう」

貴様私とどこかで会ったか？」

『はい？』

どういうこと？　？　？　？

「いや私もおかしいと思つたのだよ、なぜなら、ついこの前まで私は貴様の事を一週間ほど前に初めて会つたと思つていたよ

だが！昨日ぐらいから・・・・・・・・貴様と2才の頃出会つた記憶があつた」

『？どういつ——』

キンコーンカーンコーン

『あーやべー日直の仕事ー!』

ダッダッダッダッ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

く夜く

『あゝ眠い・・・・・・・・あいつ出ないといいけど・・・・・・・・』

あいつのことはまあ第6話見てくれれば・・・・・・・・

Z Z Z Z Z Z Z Z

「やあ出ちゃったよ!」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

なんか教室のようなとこにいて

見覚えのある俺の大切なもの奪ったおん——ガンッ
こ、今度はドロップキックか・・・・

『どーも安心院^{あんしんいん}さん・・・・・・・・』

「久々に会ってもう一週間だね

まったくあれから夢で会ってもすぐ逃げちゃって——」

『起きろー!起きろー!俺起きろー!お願い起きてー!ー!』

ガンッ

次は頭突きか・・・・・・・・

「さて！僕が1つおかしいと言ったのわかったかい？」

『久々に会って・・・ですよね？』

「うんそうそう」

そういえば会長さんも似たようなこと言ってたような

「うん君が何者か僕はわかってきたよ」

『！！！？ど、どついうことすか？』

「ずばり君は――」

異世界から来たね？」

「・・・・・・・・」

第11話 「逆らえないのさ」(前書き)

あらずじ「寝る時が最悪な時間って怖・・・」

ショックです

一回書いてちよつとトイレ行ってたら書いたやつが全て消えてた
コピーしてあったやつも消えてた・・・

泣きたい・・・

そのせいで最初書いてたやつと結構変わっちゃって・・・
ぶっちゃけ少しおかしくなってます

第11話 「逆らえないのさ」

「君は……」

異世界から来たね？」

『……………』

「さっきも言ったけど僕のさっき言ったことには、おかしいところがある、おかしいのは「久々に会って一週間」って、確か僕たちが出会ったのは一週間前のはず

でも僕たちが出会ったのはずいぶん前ってことになってる」

『……………それってどういう——』

「まあ待ちなよ……君は……異世界から来たってことでいいかい？できればそれに関する話も」

ここはあのスキル使うか……

その瞬間俺をまとう空気が変わった

『……………もしもこの世界が漫画の世界っていったら信じるか？』

「雰囲気が変わったね何かスキルを使ったのかな？」

『ああ「冷たい心」^{マインドクール}って言う、どんなことにも好きなだけクールになれる、まあ話し方もクールになっちまうんだけど、で？どうなんだ？』

「正直信じがたいけど今回は信じる方向にしとこうかな、それで？」

『俺が好きな漫画があつて、その漫画の世界に行きたいと願ったら入れたと言ったら信じるか？』

「うん！一応信じるよ！」

一応・・・か・・・

「大体異世界から来る人はそういう、なんて言うのかな強い願望があるのさ！」

『強い願望か・・・』

「でもね一番大変なのが・・・」

異世界から来た人はその世界に馴染んじやうのさ！」

『馴染む・・・どういう意味だ？』

「つまりはだね何の力なのか、異世界から来た人は前からいたことになるのさ」

『・・・・・・・・・・・・・・・・つまり

過去が変わると？』

「そう！そういうことなのさ！、そして1京のスキルを持つ僕といえど、その現象には逆らえないのさ！まあまだその現象は完全じゃないから、僕もまだ流されてはいないけど」

『知ってるのか？そういう奴を・・・』

「知ってるけど・・・それは今度ね！」

すると周りの景色が崩れていく

「ん？時間が経つのは早いね？」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「あー！つ言い忘れた現象が進むと、僕と周りの人たちもちろん君も多くのことが変わるよ」

そう手を振りながらなじみは言う

そして周りの景色は完全に崩れ

目が覚める

あいつが出ると本当に気分最悪だな・・・
しかも起きる時間が遅れる——ん？

8時30分？HRまで後5分・・・

ダアアアアアッシュー——————！！！！

く一年一組 教室く

『間に合った．．．』

「お疲れ．．．」

『サンキュー善吉ちゃん．．．』

「あひゃひゃ、バカみたいな顔して教室入ってきたときは笑ったね

」

『「鬼．．．」』

さて特に何もないので時間を飛ばそう！

～放課後～

『子犬探しの話はあと数日あるだろうし今日は帰るか』

ダッダッダッダッ

ガンツ！

いてて．．校門で誰かとぶつかってしまった

『えーとだいじょ——！！？』

「偉大なる俺にぶつかるとは無礼な奴だ」

み、都城王土！！！！？

第12話 「いやファラオ」(前書き)

あらすじ

「走っててぶつかって話が進むってそんな少女マンガぐらいだって」

第12話 「いやファラオ」

み、都城王土！！！？

・・・・・・・・・・・・・・・・

なんだこいつか

あのチート女に比べたらまだマシだな・・・
さて今日見たい番組があるし帰るか

そう思つて俺は立ち上がり校門の外へ歩く

「偉大なる俺を無視するかならば

『跪け』」

グシャッ！！

『うげ！』

喋っただけで地面に体を叩きつけられた！？こ、これって

「都城王土みやこのくにの真骨頂まこていその？『言葉の重み』だよえーと」

『白・・・水です・・・』

「よろしく白水くん僕は行橋ゆきはしみぞう未造だよ」

『よろしく行橋先輩』

「・・・待て行橋勝手に話を進めるな、おい貴様」

『なんですか？王様・・・いやファラオ』

「ファ・・・ファラオ？」

なんかファラオが理解できなさそうな表情してる

「面白いなあゝ王土を動揺させるなんて・・・」

『どーでもいいですけどこれ解除してくれませんか？』

「ふむ・・・まあ中々良い跪き方だったしないいだろう」

あ、立てる・・・

『それではファラオ、俺これから見たい番組があるので帰らせていただきます！』

「ほう偉大なる俺よりテレビを優先させるか」

めんどくせえーーーー！！！！仕方ないココは・・・

「パートインクリス半身半技」&「アスリート疲れ知らず」発動！

即・・・逃げる！！

「ほうこの俺から逃げるか、面白い」

ゝ五分後ゝ

このぐらいにげりゃだいじょ——つてええ！？

「その程度で俺から逃げ切れると思ったか」

嘘オ・・・・・・・・一応

体の半身を強化するスキルと
疲れないスキルなんだけど・・・

「それにしても貴様なぜこの距離を走って疲れていない」

本っ当にめんどくさい・・・・・・・・

『やせ我慢です！』

「そうか」

納得すんのかよ！！！！

「ふむちようどいい余興だったな

さて王たる俺から逃げたのだなにか罰を与えねばな」

完全自己中だよ・・・・・・・・とりあえず

パーティンクリス
「半身半技」解除！

・・・なんかいいスキルはないかな

ん？これ良さそうだな・・・

「まずはそうだな

『平伏せ』」

『やだ！』

「！！！！」

フッフッフこれが俺のスキルの1つ

「ことだまのさきはうひとびと
言霊の幸ふ人々」だ

言葉の重みと同種のスキルで電磁波だけじゃなく

なんというか・・・本能を操るスキルって感じかな
まあちよつと言い過ぎな気もするけど気にしない方向で

今回は電磁波の力を使って言葉の重みと相殺させただけ

「ふはっ！なるほど貴様、ノーマル普通ではないな？」

「ん？いやいや俺は普通ですよ？」ノーマル

「フンまあいい一応名前を聞いておこうか」

「しろみゆきひでゆき
白水弓彦です」

『白水が覚えておこう』

そう言ってファラオは去っていった

さてしばらくファラオにエンカウントしないようにしないと・・・
・

さて時間とは・・・

ああーーーーー番組もう終わってるーーーー！！！！

第12話 「いやファラオ」(後書き)

ファラオと行橋の話し方これであってるかな？

第13話 「ハウンドも入ってる」(前書き)

あらすじ「無視しないでよーえーん」

第13話 「ハウンドも入ってる」

・・・・・・・・・・・・・・・・

あれ？始まつてる？

はい！話が始まったのを気づかなくて最近自己紹介をしてなかった
白水弓彦しみずゆみひこだよ

今の状況は都城王土を呪う準備をしてるところ――

ではないけどね

実際は――回想へどうぞ！

「子犬探しするから手伝ってほしいんだけど」

です！

「何さつきからブツブツ言ってるの？キモイよ？」

『袖ちゃんってぶつちゃけどさだよね・・・』

「彦・・・今更か？」

「気づくの遅いよ」

もっと細かく言うとか会長さんから子犬探しの仕事を一任され

袖ちゃんに心当たりのある場所に案内してもらってるところだよ

そういえば安心院あんしんいんさんからいろいろ変わるって言われたけど何も変わらんけど

どうなってるんだ？

「にしても意外だね！あの無敵のお嬢様にそんな弱点があったなんてさ！」

『ん？弱点？』

「動物が苦手なんだって」

『へ〜』

確か・・・ここは・・・

「まあな完璧超人みたいに言われてつけだめだかちゃんにも色々あるんだよ

あいつ小学一年の頃に飼育係やったことがあってさ

その時々あったんだよ、トラウマじみたことがな」

『「へえ〜」』

「だけどさそんなこと言ってちゃ業務に支障きたさない？」

「だーかーら！そういう時のために俺がいるんだろが！さあ不知火

！わかったら早く俺を案内するんだその心当たりの場所とやらにな

！！！」

「ああ、うん、いいんだけど別に」

『「そのテンションキモイな〜」』

袖ちゃんと俺の声が被る

っていうか俺必要なくない？

「えーつと確かこの辺だけど」

おっ！着いたか

・・・そこには犬というより猛獣に近い生物がいた

いやガチで……なんかグルルツって聞こえるし

「あーいたいた！ね！あの犬だよね♪」

「不知火さんあれは違うよ、あれは散歩中に飼い主とはぐれた可哀想な犬とかじゃないよ、あれはあれだよ大都会に住んでる無責任な金持ちが、飼いきれなくなつて手放したワシントン条約で保護されてる何かだよ！！」

『あれは犬じゃないよ猛獣の部類に入る熊とかと格闘するような生物だよ』

「やだなあ2人ともあれはボルゾイって種類のれっきとした犬だって別名 ロシアンウルフハウンド！」

「ほら！ウルフって入ってんじゃん！！」

『ハウンドも入ってる！？』

ハウンドⅡ獵犬……あつても一応犬だ……

「嘘だろ？俺今からあいつ捕まえるの？マジで？くっそ……信じらんねエ、不知火、彦、お前ら手伝ってくれるんだよね？」

「え！？あたしが！？なんで！？やだよ！！」

あたしは親友のあんたが酷い目に遭うのを安全圏から眺めていただけの人間なんだから！！」

『俺も嫌です！善吉ちゃんがSATURIKUさせるのを見るだけにする！』

「いや、お前らは人間じゃねえよ」

「あんたの勇姿を写メで撮って待ち受けにするの!」

「お前今日中に天罰くだるぞ」

ムクリッ

《ガウガウッガウッ》

なんかビリビリする!?

いやいやいや犬が吠えてビリビリするってとんだけ!

「・・・ほら

『お兄ちゃんこっちにおいでよ一緒に遊ぼうよ』って言ってんじや
ん」

「どうだろうな、俺には

『ヒト共!次に俺様の眠りを妨げれば容赦なく食い散らかすぞ!』
って聞こえたけど」

『俺には』その黒いおにいちゃんと遊ばせてよ!』に聞こえるけ
ど』

「俺に死ねと!?!」

「じゃあもう帰る?すごすご帰っちゃう?せつかく人吉がお嬢様に
いいトコ見せるチャンスなのに?」

痛いトコをつくな袖ちゃん・・・

「あーわかったよ！行きゃーいいんだろ行きゃー！！」

「あつ待ってよ人吉！行くんだったらこれを持っていくんだ！、あたしのお昼ごはん！」

テッテレテーンって音楽と共に袖ちゃんはソーセージを出す
っていうか袖ちゃんそれで足りるのか？

第14話 「やめとくよ会長ちゃん」(前書き)

あらずじ「ワシントン条約？なにそれおいしい？」

第14話 「やめとくよ会長ちゃん」

やあ！犬ゆみじこⅡ猛獣に吠えられただけで吹き飛ばされそうになった白水しらみづ弓彦だよ

今は子犬探しをしてるんだ！そんな時エンカウントしたのは犬（？）だった

そして袖ちゃんがとった秘策とは――！！！！！！

「なんだ今のあらすじ……」

『まあまあ気にすんな善吉ちゃん』

「で、不知火が取り出したのは……ソーセージ？ああ、なるほど！こいつを餌付けに使うわけだな！？冴えてんじゃない！」

「んーんそうじゃなくってさ

これをおなかのトコに仕込んでね

『ぎゃああ！内臓喰われたー！……と見せかけて実はソーセージでした』ってギヤグやってほしいの」

『不知火先輩パネッス』

「そのギヤグさあやった2秒後に本当に内臓喰われるよな？」

『ま！頑張れ善吉ちゃん！！』

「……クソツやつぱ俺がやるしかねえのかとりあえず貸せ！うつうおおおお」

男だぜ善吉ちゃん

善吉ちゃんが突っ込むと犬「猛獣の目がギンツと見開き
口を大きく開けて善吉ちゃんを・・・」

「ガウツガウツガルルツ」

「ぎゃああ！内臓喰われたー！と見せかけて実はソーサー・・・
ってマジでぎゃあああつ！！」

善吉ちゃん！！袖ちゃんは・・・

「ああステキ！ステキ！人吉くんてば超ステキ」

《パシャパシャパシャパシャ》

まあこういうエゴイストキャラなんだよね

善吉ちゃんの生死？・・・・・・絶望的だね

（生徒会室）

「えーというわけでございまして不知火と彦と一緒にターゲットを
発見するも捕獲には失敗その後の逃走を許してしまいました」

「・・・・・・そうかまあなんとというか善吉と不知火の仲の
良さは不愉快だな」

『ああ会長さん俺見たいテレビあるんで帰っていいすか?』

「ん? そうか彦貴様は生徒会役員ではないから帰っていいぞ」
『あーい』

そう言つて俺は生徒会室の扉を開けようと――

ガシツ 『ぐえっ!』

としたら制服の襟をつかまれ息が一瞬できなくなる

『な、何ですか・・・会長さん』

「いや言いたい事があつてな」

『・・・・・・なんですか会長さん』

「なぜ会長さんなどとよそよそしい呼び方なのだ?」

『へ?』

「昔のようになだかちゃんと呼ぶがよい!」

凜っ!!

む、昔? どうゆうこと? 俺会長さんと会つたのはついこの前
しかも会長さんから呼ばれるときは白水同級せ――!?

そういうことか・・・・・・

安心院^{あんしんいん}さんの言つてた

「俺がこの世界に馴染んでこの世界の何かが変わる」・・・・・・だっ
け?

まあともかくそのせいで会長さんの中では俺が昔からの知り合いになってるのか

「……………確か2才の頃会った記憶があるとか言ってたから2才の頃からの知り合いって感じが……………」

っていうか俺には直接影響なくね

ここまでの思考時間3秒

ちなみに「冷たい心」^{マインドクール}は使ってないよ

「どうした？彦？」

あつ善吉ちゃん忘れてた

善吉ちゃんは会長さん「さあめだかちゃんと呼ぶがよい！」

『いやなんか恥ずいのからやめとくよ会長ちゃん』

「（会長ちゃん？）」

「ふむ、そうか残念だ」

『まあ気が向いたら呼ぶよ、んじゃガチで見たい番組があるから』

うーんついさっきまで敬語を使ってたからなんか変

とりあえずなれなれしく「会長ちゃん」にしといたけど……………あつアレ始まっちゃうよ！

そのまま帰る途中に……………少し気になるので犬Ⅱ猛獣のいる場所へ行ってみた

好奇心には勝てないね

「……なんか会長ちゃんが犬(?)の格好してる……

『何してるんで……何してんの?会長ちゃん』

あやうく敬語使うところだったぜ

「ん?おお、彦か、見てわからんか?」
『うん』

なんかキツパリって音が聞こえた気が……

「ターゲットに私を仲間と思ってもらおう作戦だ!」

一瞬袖ちゃんの中の時が止まるそして復活

「……ねえ人吉このお嬢様ひよつとしてさあ……」

「あ、気づいた?うん、一週回って基本バカだよ」

「?」

『………プッ』

「(笑ってるよ……)」

「さてそれであやつがターゲットか」

会長ちゃんがチラッと犬⇨猛獣の方を見る

「ふうむなるほどな、なかなかどうして可愛いワンちゃんではないか!」

あれが……可愛い……だと!

「あんま強がんよ不知火と彦と三人で何とかするからさ！」

善吉ちゃんがそう言うのと会長ちゃんはすごく嫌そうな顔をする

「ふん！いいから貴様達はそこで見ているがよい！私がいつまでも過去に囚われる女ではないことを証明してくれる！」

「………？何ムキになってんだあいつ……？」

「妬いてんじゃないのー？あたしと人吉と彦が仲良すぎるから」

え？俺も？

「あ？俺はお前と友達なのかどうかも微妙だと思ってんだぜ、的外れにも程があるだろ」

「あひゃひゃ！いずれにしてもお嬢様って案外人間味があるんだね、バカだったり妬いたり動物の事苦手だったりさ」

『ん？袖ちゃん1つ勘違いしてるよ』

「そうだぜめだかちゃんは動物の事嫌いなんかじゃねーよむしろ半端なく大好きだ」

会長ちゃんが犬イコー——え？しつこい？知るか！

犬Ⅱ猛獣に近づくと犬Ⅱ猛獣はビクツとし会長ちゃんの後ろに悪魔を見るように怯える

「さあ怖くないぞ撫でてやろうぎゅっとしてやろう一緒に遊んでや

ろう！だからさあ！私に貴様を触らせる！！」

いや最後めいれ—— あつ犬「猛獣がガバツと立ち上がって
こっちに来て俺と善吉ちゃんの後ろに

「え・・・と人吉くん彦くんこれどーゆーコト？」

「だからさめだかちゃんが動物を苦手なんじゃなくて」

『動物が会長ちゃんを苦手なんだよ』

そう俺達が言つと善吉ちゃんは犬「猛獣の頭を撫でる

俺？俺、実は犬苦手なんだ、作者と同じで

「えーというわけでございましてボルゾイくんは無事に投書主の下
へ帰りました、子犬の頃より若干おとなしくなっているそうですが
一件落着には違いはないと」

「・・・・・・・・・・私はあんな可愛いワンちゃんにもなつて
もらえないなんてわたしはどうしようもなく駄目な人間だ・・・」
「いやまあ？確かにお前は人間だよ」

・・・・結局テレビ見れなかった・・・

第14話 「やめとくよ会長ちゃん」(後書き)

主人公これで遠慮なく原作を読んで知った知識を言えるな
今回長い・・・2400文字越えした

第15話 「うん野菜ジュース」(前書き)

あらすじ「会長さん↓会長ちゃんの方程式(?) 完成」

第15話 「うん野菜ジュース」

「食堂」

わいわいわいって言葉が聞こえるな」

あ、もう皆知ってると思うけど皆のお兄さん白水弓彦しみづゆみひこだよ！

今は食堂で袖ちゃんと善吉ちゃんとひゅうちゃん（日向）と飯食ってるところだよ

袖ちゃんは絶賛ラーメンに顔突っ込み中
前回結構設定的なものが変わったよ！

「えーっと昨日ボクシング部行ったから・・・格闘技系はこれでコンプリートか、じゃあ次は趣向を変えて格闘球技攻めてみっかなー」

《ズズズ》

「・・・・・・お前どうしてそんなあちこちで暴れてんだ？
そんなスポーツ好きだったっけ？」

《ズズズ》

「別に、俺の中のルールでな、一日5リットル汗かくって決めてんだ、お、ラクロス部あるじゃん」

《ズズズズズズズズ チュルンツ》

「ぶっはあああああ、あーわかるわかるあたしも一日5リットルのラーメン飲むって決めてるし」

「不知火、ラーメンはドリンクじゃない」

『袖ちゃんにとってシーザーサラダって・・・』

「うん、野菜ジュース」

「ま、それくらいにしないとあの黒神^{バケモン}には付き合いきれないってのはわかるけどもうやめといた方がいいかもな」

おお！ひゅうちゃん！ナイス無視！

「お前の噂になってるぜ生徒会の『部活荒らし』だとよ、入る気もないくせにつて」

善吉ちゃんがひゅうちゃんをじーつと見る

「なにお前俺のこと心配してくれんの？」

「バツお前の心配じゃねーよー！！」

ひゅうちゃん完っ全にツンデレってやつだよ・・・

「いーんだよこちら最初から名前を売るつもりでやってんだから、っ！かお前なに仲間みたいな顔して一緒にごはん食べてんだよ」

善吉ちゃん・・・何気にキツイ・・・

「・・・？」

「カツ！しかし「部活荒らし」かそのニックネームじゃ少し弱いな」

「名前を売りたいのかい？人吉くん」

「鹿屋・・・先輩」

え！？こえっ！！突然現れた人こわっ！？第一印象こわっ！！

「ちよいと面貸してくれや人吉くん、相談に乗ってほしいんだよ、なあーに人吉くんにとっても悪い話じゃねーと思うぜ？」

「・・・・・・・・・・なんか怖そうなヒトだったけど人吉一人で行かせてよかったのか？」

「んー？別にいーんだよあたしと人吉って都合のいい時だけ友達だし」

「いや僕も結構悪いやつだけどさ、お前は最悪だな不知火！！」

「あれ？白水は？」

「んー？ついてったよ」

「まーあいつなら大丈夫か・・・」

《プチンプチン》

「黒神めだか襲撃計画？」

「面白そうな計画ですね」

「ああ今有志を――！！だ、だれだ！？てめえ！」

「みんなの人気者一年一組白水弓彦です！」

「そうかじゃあ白水くんも一口乗らねーか？今有志を募ってただよ」

いやー人を驚かすって気分いい！え？性格悪い？ほめ言葉だぜ！

「キツイ冗談ですねこの腕章が見えないんですか？どー考えても誘う相手を間違ってるでしょまあ彦を誘うなら別にいいーですが」

『えー？俺いいの！？ちよつちよつ善吉ちゃん』

「うざい！寄るな！」

とゆーかこの先輩なぜ学校で爪を切っている？家でやれよ学校に爪切り持つてくる人始めてみた

「いやあ間違えちゃいねーさ生徒会庶務とかいって結局はバケモン女のパシリやらされてるだけじゃねーか入る時もかなり抵抗したって聞いてるぜ、」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

確かここ少し長めの話になるから少し飛ばさせてもらうか

『そつえば袖ちゃんから聞きましたが鹿屋先輩って女子脅して票集めてたらしいですね、そこを会長ちゃんにやられてキレてると・・』

『・』

「自業自得ですよ」

「ハッ！いい子ぶってんじゃねーよ人吉クン！俺はこれでもお前を買ってんだぜお前みたいな頑張り屋さんが埋もれていくのを見てらんねーんだよお前にだってなりたいモンぐらいあんだろ？」

「なりたいもの・・・ですか」

「今日の放課後作戦会議やつからよこつちに寝返るならそれまでに
な、なあにたとえお前が裏切ってもあの女は気にもしねーだろうよ」

『「・・・・・・・・・・」』

第15話 「うん野菜ジュース」(後書き)

さて長くてきりがないのでは今回はここまでです！
なんか中途半端ですいません

第16話 「余計な真似だよ!!」 (前書き)

あらすじ「深爪した・・・」

第16話 「余計な真似だよ!!」

『「・・・・・・・・・・・・・・・・」』

そのまま鹿屋先輩はどこかに行ってしまった

「はあーあ！めんどくせーことになってんなあ！」

「いやめんどくさくない実心躍る展開だ」

いつの間にか善吉ちゃんと同じポーズをとる会長ちゃんがいた

「・・・・・・・・・・・・・・・・いつからいたの？」

「最初から」

凜っ

『会長ちゃん前から思ってたけどその「凜っ」ってどうやって出してるの？』

「だったらお聞きの通りだ嫌われたもんだなめだかちゃん」

え？無視？

「構わんさ、もとより私は人から好かれようとは思っておらん、私が人を好きであればそれでよい」

会長ちゃんが

（初代プリキュア・・・の白い方・・・）

のポーズをする

ちなみに作者も俺もプリキュア知らないぜ！

「余計なマネをする出ないぞ善吉、彦、この件は私が個人で対処する、下克上を受けて立つのも王の務めだ！」

「余計な真似？するわけねーだろそんなこと」

『会長ちゃんは敵すら好むからね』

「鹿屋さーんエモノはこれくらいありやいいんですよねえ？」

「・・・いやこの倍は欲しいな、それともっと長エのたくさん揃えておけ」

「警戒しすぎじゃないスか？いくら化け物じみてるつっても相手は女一人でしょ？」

「馬鹿野郎！化け物じみてんじゃねえ！化け物なんだよ！アイツは！おい！誰かあのバケモンの弱点とか聞いたことねーのか！！」

『動物が大好きですよ』

「好きなモンじゃねえ！じゃくて——！！て、てめ、し、白水！」

『どーも鹿屋先輩・・・』

「・・・まあいいさお前が来るってことは・・・」

ガラッ

「お・・・おお！人吉くん！いやー遅かったじゃねーか、待ってたぜ・・・つて、え？」

善吉ちゃんは鹿屋先輩を無視して教室の真ん中に歩き武器が入った箱を蹴り倒す

「・・・・・・・・・・・・・・・・何の真似だよ」

「めだかちゃんはアンタ達みたいな人も大好きだしアンタ達は何をしたところで傷ひとつ負わないでしょう、だけど知っちゃったところうせずにはいられない一人で何でもできる幼なじみを俺は・・・・・・俺達は放っておけないんですよ、鹿屋先輩なりたいものらいあるだろうって言うてくれましたよね俺達はめだかちゃんを守れるやつになりたいんですよ」

善吉ちゃん長いセリフご苦労さんです・・・・ん？あれ？おれたち？俺も！？

「ハア？わっけわかんねえ！だから！これは一体何の真似だよ！！」

鹿屋先輩が釘を刺した棒で善吉ちゃんを殴ろうとする

『「余計な真似だよ！！」』

善吉ちゃんと俺で鹿屋先輩を蹴り飛ばす！鹿屋先輩は壁に叩きつけられる

『アンタ達には改心する暇も与えせんよ、明日から頑張つて噂を流してください』

「生徒会長黒神めだかのそばには凶暴な番犬イヌが二匹いるつてな！
それではこれより一身上の都合に基づき生徒会を執行する！！」

あれ！？また俺入れられた！？あと俺、犬嫌いだし！！

ちなみにその頃の会長ちゃん

「・・・・・・・・・・・・・・・・誰も来ない！」

第16話 「余計な真似だよ!!」 (後書き)

何気に原作のこの回結構好きなんだよね

さて！今回はアンケートをとりたいと思います

アンケート内容はコレです←

彦に並ぶオリキャラはというのがいいかです

名前でも性格でも容姿でもスキルでもなんでも言うってください！
皆さんの送るやつによってオリキャラは変わります

例 性格 真面目・・・とかです

表現の難しいのはやめてください

ちなみに性別も考えていいですが女子キャラの予定です

ではよろしくお願いします

注 オリキャラの設定の募集ですオリキャラの募集ではありません
まあオリキャラを送ってもらって結構ですが

第17話 「いやザメンが」(前書き)

あらすじ「BOKOBOKOにしたぜ!」

第17話 「いやウザメンが」

はい皆！白水弓彦お兄さんだよ！
しろくすゆみひ

今日は善吉ちゃんと会長ちゃんと柔道部に來てるよ！

なんか三年生でしかも特待生チームトクタイの柔道部部長の鍋島猫美さんからの投書で柔道部の部長を決めるらしい
ちなみに鍋島先輩は柔道界の『反則王』と呼ばれてるらしい

でもなんか善吉ちゃんのテンション低いな、なぜか聞いてみるか！

『どうした善吉ちゃん・・・なんか嫌なやつに会わなきゃいけないような顔してるよ？』

「なぜわかる」

『えーと・・・勘？』

「あつそ」

ツツコンでよ・・・

「なんであの人もこのガツコに來てんだよ（ブツブツ）」

「何をブツブツ言っている？着いたぞ」

『え？展開はや・・・』

つていうか・・・ダンッ ドガッ とかいう鈍い音が聞こえるんだけど、怖・・・

そして道場に入ると

「やーやーようこそいらつしやいませ！ウチが差出人！柔道部部长の鍋島猫美でっす！今日はどーぞよろしく！」

かるっ！反則王かるっ！

「生徒会長の黒神めだかだ、今日はできる限りの事をさせてもらっぞ」

「うんうん頼りにしてるで黒神ちゃん！ところでその子は何者なん？」

『え？俺すか？』

「そージブンやジブン！」

『えーと白水弓彦です気軽に彦と読んでくださいな』

「・・・そつかよろしくな彦くん！ウチのことはテキトーに読んでくれていいで！・・・あ！そーや黒神ちゃんに挨拶したい奴おんねん阿久根！おーい阿久根くん！」

鍋島先輩・・・いやナベちゃんがそう呼ぶと

「いやテキトーにっていうたけどナベちゃんはないわ」

『なぜ心が読めるんですか・・・』

「んー？勘？」

『そうですか・・・』

まあいいや、すると道場の端のドアが開くと

なんということでしょう！うざいくらいのイケメンが入ってくるではありませんか！

うん・・・死んでほしい・・・これほとんどの同年代男子の心の声だね

そのイケメン・・・いやウザメンがこっちに・・・会長ちゃんに一直線に向かう

そして会長ちゃんの前で跪き

「ご無沙汰しておりますめだかさん——生徒会立ち上げの大事な時期にお気をわずわらせてはいけないと控えておりましたがずっとあなたに再会できる日を心待ちにしておりました」

・・・・・・気持ち悪い！！！！！！！！！！

気持ち悪いから善吉ちゃんの隣に避難しよ

そんな気持ち悪いウザメンを会長さんは

「堅苦しい真似はよせ阿久根二年生他の者が見ておるぞ貴様ほどの男がそのように振る舞っては示しがつくまい」

「いえ誇りこそすれあなたにかしづく姿を恥とは思いません、今の俺があるのはあなたのおかげなのですから、めだかさんにはいくら感謝してもし足りない——」

会長ちゃんはウザメンの頭を強く掴むそして

「私に感謝していると言うのなら頭を下げるな！胸を張れ！！」

「は・・・はいっ！めだかさんのっ御心のままにっ！！」

気持ち悪いよ（泣）善吉ちゃんもウザそうな顔してるし・・・

「おっとそれはそれとして生徒会を執行せねばな、後継者、つまりは新部長の選定だったかとりあえず貴様は特別枠だ阿久根二年生善

「「!!」」

「なんだい、いたのかい？白水クン」

「彦、いつの間に・・・」

『え！？気づいてなかったの!!?』

「まあそれはそれとして、久しぶりだね白水クン」

ん？久しぶり？・・・ああ！現象でこの人も前からの知り合いになつてんのか・・・

『お久しぶりです・・・ところで・・・俺あんた・・・あなたのことなんて呼んでましたっけ?』

そこかよ!!?つてツツコンだ読者の皆さん！ココ重要ですよ!!

「え・・・高ちゃんと呼んでたけど・・・いきなりどうしてそれをする?」

『いえ！なんでも!!』

高ちゃんか・・・俺先輩まで「ちゃん」付けしてたのか・・・

グシャ!!!

『「「!!!!」?」』

会長ちゃんの方を見てみると人をなぎ倒していた

そしてどうしてこうなったのか

「ルールは柔道部恒例の阿久根方式な！無制限十本勝負対無制限一本！それも今回は特別ルール！二対一な！」

どうしてこうなったの？

第18話 「逃げちゃ」(前書き)

あらすじ「イケメン抹殺！」

第18話 「逃げちゃ」

「ルールは柔道部恒例の阿久根方式な！無制限十本勝負対無制限一本！それも今回は特別ルール！二対一な！阿久根クンに十本取られるまで一本でも取れば2人の勝ちや」

どうしてこうなったの？

なんか・・・善吉ちゃんをくれとかナベちゃんが言ってたのは覚えてるけど・・・

「彦・・・覚悟決めとけ・・・」

『・・・逃げちゃダメすか？』

「逃げる？そんなものアリなわけなからうが、誰からの相談でも誰からの挑戦でも受けつける——如何な内容でも如何な条件でも！如何な困難でも如何な理不尽でも享受する！それが箱庭学園生徒会執行部だ！！人吉善吉、白水弓彦、私は貴様らに負けるなどとは言わん、しかし逃げることは許さんぞ！！」

凜っ

『俺生徒会じゃねーんだけどー！！』

「ふむ・・・そうだったか・・・まあいい」

『え！？じゃあ逃げても——』

「逃げるな」

『ガンー！！』

すると善吉ちゃんが小声で話しかけてくる

「彦・・・一気に決めるぞ、先手必勝！」

善吉ちゃんが高ちゃんに向かって走る

しかし高ちゃんは善吉ちゃんをあつさり強くひっくり返す

そしてこう言う

「人吉クン俺は何もキミのすべてを否定しているわけじゃない、めだかさんについていくために費やしてきたキミの努力は認めている、だが努力以外は認めない！！」

「ガ・・・ガハアツ！？」

「立てあと九本だ、白水クン君はそこで見ているだけでいいから」

『うーん・・・頑張れ善吉ちゃん！』

「裏切り者ー！！」

そして数分後

「くそっ！もう九本取られちゃった・・・」

『大丈夫か？善吉ちゃん！立てる？』

「うるせえ！裏切り者！！」

『まあ聞けつて・・・ボソボソ』

「！・・・できんのか？」

『任せてちよんまげ！』

「白水クン・・・参加するのかい？」

『さあ〜どうでしょ〜？』

善吉ちゃんが立ち上がる

「訂正しよう努力以外にその根性も認めてやる・・・いいだろう！その往生際の悪さに敬意を表してもう楽にしてやろう！めだかさんの足を引っ張る仕事も今日で終わりだ人吉くん！！」

高ちゃんが善吉ちゃんに向かって走る・・・とどめを刺すために・・・

だがその足が止まる・・・俺が高ちゃんを真正面から受け止めたからだ

「白水くん！？」

『悪いですけど悪あがきさせてもらいますよ』

「そうか・・・なら仕方ない」

うおっ！？投げ飛ばされる！！？・・・しかーし！！

踏みとどまる！！

「な・・・に・・・！？」

どうやって踏みとどまったかは・・・あれだ

バートインクリス
「半身半技」を使った一応説明すると

体の半身、又は、一部を強化するスキル・・・です！

それを使って足首を強化して踏み止まってるって感じだ

そして！「バイオレンスナックル暴力以上の暴力」！！

これは自分に暴力的な強さを与えるスキルだ！

一応身体能力も強化される

ただし反射的に暴力的な戦いをしてしまう！そこを「冷たい心」マインドクールで抑える

これも説明しとくと自分と体を冷静にクールにするスキル

自分をクールにする事で反射を抑えている

ただし口調もクールになってしまう

さて長い解説は終わりだ、これで決める！

俺は高貴を押し飛ばす

そして高貴の体勢が崩れたところを――

『今だ！善吉！』

「ぐ……」

！！！？やばい！善吉フラフラだ！

……いや確かココは

「善吉！いつ如何なる場合においても決して私は貴様に負けるなど
は言わん、だから勝って！！」

きやるゝんという音が聞こえる

「貴様がいなくなったら私はすごく嫌だぞ、困るぞ、泣いちゃうぞ
！」

「あーっもうっ……お前が泣くところなんか見たことねえし、見た
くもねえよ！！」

そう大声で言いながら善吉は高貴の足を掴み引つ張り倒す

「もっ双手刈り！」

「珍しい！なんであいつあんな技知ってたんだ！？」

「文字通りアンタの足も引つ張つてもみました————ってところで何を認めてくれるんでしたっけ？阿久根先輩」

「……………負けを認める！一本取られたよ」

もうスキル解除していいかな……

「……………信じられへん二人がかりとはいえ阿久根クンにホンマに勝つてしまいたいやそれよりも双手刈りならウチもよう使うけど人吉クンはなんであんなにも綺麗に……！」

「綺麗も汚いもないし天才も凡才もないいるのはただの懸命な人間だけだ私も貴様も何も変わらんよ」

「……………なあ黒神ちゃん阿久根クンで柔道も綺麗やけど字イも綺麗やつて知ってた？」

『結局継ぐのは……じょう……なんだったっけ……』

「わかんね忘れた……」

「じゃあプリンスは？阿久根先輩はどうなったの？」

「さてな、なんか居辛くなって柔道部やめたって聞いたけど、ま、

俺達にはもう関係ねえ――」

ガラッ

生徒会室のドアを善吉ちゃんが開けると・・・なぜ・・・

なぜ高ちゃんが着替えてんだーーーー！！？

そしてなぜ袖ちゃんはキャーキャー言ってるんだ！！？

そんなわけで阿久根高貴が仲間になった

え？俺の意見？『イケメン消え去れ！！』

第19話 「なんで俺」(前書き)

さてついに2巻突入です!!

いやゝ遅かったなゝ予想以上に長引いたなゝ

これからよろしくお願いします

あとアンケートもお願いします

あらすじ「阿久根高貴ゲットだぜ!!」

第19話 「なんで俺」

生徒会の自主性を何より重んじる箱庭学園

その生徒会業務は多岐にわたるそれが何を意味するかというと――

『「俺達の限界。」』

「……………人吉くん、俺生徒会やめちゃダメかなー？」

「あつはつはつ！逃がしませんよー阿久根先輩」

『俺は何故手伝わされてる？帰っても――』

「逃がさん！！」

「……………しかし、さすがにめだかさんはさすがだなあ、俺達の十倍は働いてるはずなんですけどね」

「否、そんなことはない、さすがの私も最近の業務ラッシュには少し参っておる」

そう言いながら会長ちゃん片手2本両手4本でペンを持って書類を片付けていく

「どこが？」

「勧誘期間が終わり部活動が本格化したのが大きいな、部費に関する陳情が多過ぎる！」

「カツ！副会長はともかく、会計の不在はやっぱり痛いな」

「元柔道部の人間として言わせてもらえば部費は一円でも多いほうがいいですからね陳情する連中の気持ちはわかり——ガラッ
ボタンッ」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「あれ？彦は？」

「む？その窓からでてったぞ？」

「逃げやがったあー！！！！」

大成功！！

「部活動対抗水中運動会？」

「おう、こないだ完成したバカでけえ屋内プールがあっただろ、次の日曜に——ガラッ」

『ウィッス！袖ちゃん——「コノヤロー！！」がふっ！』

一年一組の教室に入ったら善吉ちゃんにアップパーをくらった・・・

『ひえんふいふいふあんいひあい』

あごが痛くて上手く話せん・・・ちなみに訳すと『善吉ちゃん痛い』だよ

「人吉」話の続き」

「あーはいはい」

『そふえひあんたほけふえて』
「やだ！」

今のわかったのかよ！？一応訳すと『袖ちゃん助けて』だ

「次の日曜にそこでイベント開催して優勝した部が増額総取りって段取りだ」

「ふう〜ん、ま、でもプールじゃ水系の部活が有利じゃない？」

『いやいやちゃんと考えてるよ水中パン食い競争とか——バキッ！ひ、ひでえよ善吉ちゃん・・・』

「俺のセリフだ！！」

「ふつうううううううううううん！」

「なんだよなんか言いたいこともあるのかよ不知火先生よお！」

「言いたいことお？ないよ〜ないない一個もない！」

「・・・・・・あつそ！」

善吉ちゃんが横にプイッと向く

「ただー！場所が水中じゃあ公平なんてありえないんじゃないかしら？って

言いたいだけだよーん、何せ箱庭学園の競泳部には金にうるさい三匹のトビウオがいるからさ！」

「・・・競泳部？トビウオ？なんだそりゃ？どういうことだよ教え

ろよ！」

善吉ちゃんは袖ちゃんの肩に手を置く袖ちゃんは目元を光らせその手をはじく
そして

「教えてください・・・だろ？」

『「教えてください！」』

「よかるう！」

（（あの3人の仲の良さが気持ち悪い！））

「いるんだよ、そういう奴らが！3人とも特待生でその実力は折り紙つきだけどにかく金の亡者！賞金つきのレースにしか出場しないとか！お金で雇われて他校の選手として泳いだりとか！八百長なんて当たり前で独自に賭けレースを運営してるなんて話もあったねえ！」

『へえ〜』

「ま、精々用心しとけば？あのお嬢様は無敵であつたも決して無敗じゃあないんだからさ！」

『さあ貴様達戦争の時間だろ、働かざるもの食つべからずと云うがこれは真理に反している、私達はむしろ言つべきなのだ』

働いたものは食ってよい！貴様達欲しい部費モノは勝って得よ！！」

・・・相変わらずの直言壮語だね・・・にしても高ちゃんが目ハートにしてて気持ち悪い・・・

『ところで善吉ちゃん・・・』

「なんだ？」

『なぜ俺までこういう水着かっこうなんだ！？』

そう今俺は水着なのだ！なぜ水着かというと・・・

「仕方ねえだろ今回の水中運動会は4人でチームなんだから」

『なんで！？部活動對抗じゃないの！？』

「いや白水クンどうやら」

『この水中運動会には我々生徒会執行部も参加する！』

なるほどね

・・・

『なんで俺なんだ——————！！！！！！』

俺の叫びがプール内に響く

第20話 「短っ！そして浅っ！-」（前書き）

あらすじ「オリ主は巻き込まれる運命である」

第20話 「短っ！そして浅っ！！」

『部活動対抗水中運動会！第一種目は水中玉入れ！でわでわっ！これより開始したいと思います！ルールは説明しなくてもいいですよね！プールの底に沈めてある各チーム20個ずつのお手玉を制限時間内にできるだけ多くカゴの中に投げ入れてください！カゴに入ったお手玉の数がそのまま獲得ポイントとなります！それじゃーみなさま！はりきっていきましょーっ！おーっ！と申し遅れました！本大会実況はわたし放送部部长代行、阿蘇短冊が！解説は――』

「この世に知らぬことなし！一文字流不知火ちゃんでーす！」

『がお送りします！！』

「えー不知火さんは生徒会執行部所属人吉さんと白水くんの大親友ということですか？」

「うんそうだよー長ーく深ーいお付き合い！ま、2人のことならなんでもあたしに聞いちゃいな！」

「はー！ちなみにお2人とはどういったなれそめで？」

「エットネー中学までは別でー人吉とはこの四月初めて会ったんだけどーあいつあたしが落とした消しゴム拾ってくれたのー！彦はこの前お弁当のおかず交換してくれたの！」

「短っ！そして浅っ！！」

（不知火の奴・・・まーた適当な事言ってんなあ・・・）

『袖ちゃんには困ったもんだよね』

「ククク！ルールの設定間違ったんちゃうけ？」

『ナベちゃん・・・』

「ナベちゃんやめてくれへん？」

『お断りします、っていうかナベちゃん引退したはずじゃ・・・』

「ククク！まあ部長職こそ引退したけども！ウチは反則王の称号まで捨てたわけやないんでな！」

（（（なんでこの人はこんな堂々と卑怯なんだ・・・？）（））

「構わん反則も卑怯もそれが貴様の志なら貫くがよい、無論私は私の志を貫くぞ、いい戦争をしよう鍋島三年生」

凜っ

（（（・・・・・・・・・着替えてる））

つか高ちゃん目えハートにすんのやめて・・・

『えー部費増額を賭けた本大会ですがまずは第一種目どう見ますか解説の不知火さん？』

『んー玉入れなんてみんな小学校以来だろうから得意も不得意もないと思うけど強いて言うならバスケットとかが強いかにゃー？』

『え？バスケットですか？』

『うん水中だろうが陸上だろうが玉入れは玉入れだし、結局はカゴにボール入れられなきゃ話にならないからねー』

『・・・・・・・・・』

『なに？』

『いやまともなことも喋るんだなーと思つて・・・』

『まあ玉入れには玉入れのテクニクがあるんだけどもそんなの知つてる奴いないだろうし？あたしはちゃんと働くよん、もらった食券分はね、だからあたしが注目してんのは玉入れとかどーとかそーいうトコじゃないんだよねー』

不知火は怖い笑みを浮かべる

『・・・・・・・・・・・・・・・・えーと・・・あれ？（なんだこのコ、コワイぞ？）あ、あら！そんなことを言つてる間にもう時間一杯ですネ！みなさん準備はよろしいでしょうか！位置についてよおおおおい！』

『ドン！！』

『ぬおおおお！！！！お手玉重い！プール深い！！』

『なにやつてんだ？彦？』

『へ？』

『おーっと早くもプールはアビキヨーカンの様を呈しております！どう見ます解説の――』

『あひゃひゃひゃひゃひゃ！楽しげ！楽しげ！人間が右往左往して面白ーいっ！！』

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

『ぷはっ！』

『部長！っ！うまくお手玉が拾えません！』

『それに外れたらまた水の中に沈んじゃいます！』

『あー部長ちやう元部長元部長！（ちゅーかマジで難易度高いでコレ、なめとつただけ予想以上にハードな競技やん！こんな生徒会

の連中はどないしとんや——」

「よっ」

「こらせ」

善吉と阿久根がプールから上がる

「ってうおおいっ！！ジブンらなに戦線離脱しとんねん！！」

「なにつて・・・ほら」

「その辺うろろしてめだかさんの邪魔してはいけませんから」

「はあ？え・・・なに？黒神ちゃん？そないゆーたら黒神ちゃんはどこ行ったんや？」

「どこに？どこにですって鍋島先輩？どこにいたって同じですよ、反則と卑怯があんたの志なら王道と霸道がめだかちゃんの志！めだかちゃんはいつでもどこでもその志を貫いてる！！」

するとプールからめだかがお手玉を大量に持って上がってきてお手玉を

『おっおおおおおおおおおおっ黒神めだかつ！お手玉をつ！一気に！まとめて投げ・・・！』

まとめて一気に投げカゴに入れる

『はっ入ったアアアッせっ生徒会執行部！なんと一気に20ポイント獲得だぁーっ』

他の選手は啞然とする

『すごい・・・！しかもあんな滅茶苦茶な投げ方で・・・！』

『いやあれで正しいんだよ、さっき言った玉入れのテクってことなんだけど1球ずつ投げるよりいくつか固めて投げるほうが効率がいんだ、タマがでかけりやマトは狙いやすいし重力と慣性が働くからね上に投げる分には意外とバラけないんだよ、それでも20個つてのはあたしでさえ聞いたことないし、なにより今までずっと潜ってた肺活量の方が驚きだね！さすがはさすがの生徒会長ってところかな！』

『なるほどー！しかし解説の不知火さん、今それ言ったらみんな真似しちゃいません？』

『あ』

ピピイイイイイ

『終ー了ー！それまでーすー！』

第20話 「短っ！そして浅っ！！」（後書き）

彦『俺空気！！』

作者「仕方ないだろ原作に沿わずとオリ主の影が薄くなるんだから」
彦『ちつくしうー！！』

第21話 「生徒会じゃないけどね」(前書き)

あらすじ「主人公のセリフ1、2回(泣き)」

第21話 「生徒会じゃないけどね」

「うーんほぼ横並びになってしまったな、順番によるポイントも考慮すべきだったか？」

「なアにこれくらいの方が盛り上がっていいですよ、むしろ俺は生徒会がぶつちぎる展開の方が怖かったですし、めだかちゃんの空気の読めなさは本気でデビルですからね、勝負事になったら手が抜けねーんだから、主催者がトップじゃ不公平感は否めませんしそういう意味じゃ不知火に感謝ですか」

「いや善吉、不知火に感謝する必要などない」

いつの間にか善吉と同じポーズを取っているめだかが後ろに

「（俺はもうオドロかない）こういうことだよめだかちゃん」

「どの道私達はトップではなかったのだあやつらを見よ」

めだか、善吉、阿久根は競泳部の三人を見る、そしてめだかはこの続ける

「密やかにしかし軽やかに誰にも気づかれることなく、しかし誰よりも速く私達よりも先に20ポイント獲得した者達だ」

「（競泳部……！不知火の言ってたトビウオ三人衆か！しかし三人がかりとはいえめだかちゃんよりも速いだと！？）……あれ？彦は？」

「その頃のわれらが主人公は」

ぶかぶか

水に浮かんでいた・・・

ありがとう主人公！さよなら主人公！！君のことは忘れない！！！！

『殺すなーーーーー』

なんだ生きてたのか・・・

『ナレーションだろアンタ普通に話すな！！』

ちっ！

『もう黙ってくれ・・・』

（ここからはモノローグに戻ります）

『では続いて二回戦に参りましょう！第二種目は水中二人三脚で！
つす！！』

箱庭学園特待生主制度についての解説――

教育熱の強い箱庭学園理事会は日本津々浦々から数多の特待生を迎えている

具体的には十組以上の生徒は全員が特待生！

学費免除は当然のこと彼らは学園生活において各種便宜が図られている

1 2 3 4組 普通科

5 7 9組 体育科

6 8組 芸術科

以下特別科（特待生）

1 0組 特別普通科

1 1組 特別体育科

1 2組 特別芸術家

1 3組 特別

らしいよ、この前袖ちゃんに教えてもらった

『増額部費争奪！部活動対抗水中運動会！第二回戦！水中三人四脚です！！この競技もルールはいたってシンプル！各チーム代表者3名が足を紐でがつちり結んで50mプールでかけっこしていただきます！！1位でゴールすれば15ポイント！以下2位14ポイント3位13ポイント・・・と続きます！最下位16位の0ポイントは避けたいですね！』

「いいかい人吉くん白水くん確かにイベント主催者である我々生徒会がチギってしまうのはよくないけれどだからといって真剣勝負で

手を抜いていいということにはならなんんだよ?」

俺は生徒会じゃないけどね・・・

「ええ勿論!やるからには全力を尽くしましょう!俺が二人のペー
スに合わせますから!」

『俺も二人についていけるよう頑張ります!』

俺と善吉ちゃんの目がキラキラ光る

そして高ちゃんはそんな俺達の言葉を聞いてじーんとしながらこう
言う

「そうかそうか!これは人吉くん達に対して愚問だったな!俺は出
来のいい後輩を持って幸せだよ!」

「こちらこそです!さあでは!例によって生徒会を執行しますか!」

『俺生徒会じゃないけどね!』

「おうとも!ともすれば個人主義に走りがちな今時の高校生達に俺
達の団結力を見せつけてやろう!」

善吉ちゃんと高ちゃんは握手しながら言う

『位置についてよおおおおい・・・どんっ!!あーっ!と生徒会が
いきなり飛び出したあーっ!・・・・・・・・・っ
言うかこれは三人で協力してると言うより二人で競争しています!
しかも白水くんは完全に引っ張られています、何やってんだアこの
二人いーーーーーっ!!』

「不愉快な虫が！生意気に俺のペースに合わせるな！」

「ああ？アンタこそさっさと足つって沈めや！！」

『俺忘れられてる』

『いがみ合いながら走っております、しかも白水クンを忘れて！これは醜い！悲惨な画だ！！』

「あーひやひやひやひやひや」

『おや？不知火さん注目の競泳部！大きく出遅れているようですが――？』

『あーうんそりや仕方ないよさすがにオールラウンダー屋久島先輩でも種子島先輩に合わせられるのは25メートルがやっとだろうしね』

『？』

『善吉ちゃん高ちゃん落ち着いて――！？』

「待たせたな種子島」

「いーえいえいえ！待ってたんじゃなく待ちに待ってただけですわ
♪それじゃあ泳いきますか」

『おっ・・・っつおおおおつとこれはあああっ！！』

足つないだまま泳いでる！！？しかもそのまま俺らを追い抜いて

『競泳部！そのままゴールイン！！15ポイントげっとおおおー
っ！！2位は陸上部！生徒会は後半遅れて3位になりましたここは
団結力の差が出たかー！？』

続く三回戦は『ウナギつかみどり』1匹1ポイント、各チームより
一名参加の競技

競泳部の一年生エース喜界島は13匹捕まえて13ポイントゲット
生徒会は会長ちゃんが参加、スキル『動物避け』発動、0ポイント

てかまた俺空気・・・

ちなみに最終競技は袖ちゃんが決めるらしい・・・

第22話 「俺はどうした」(前書き)

あらすじ「ブックブック」

第22話 「俺はどうした」

『部活動対抗水中運動会！最終競技は水中騎馬戦です！泣いても笑ってもこれで優勝チームが決定します！部費増額の権利を手にするのは果たしてどのクラブとなるのでしょうか！では解説の不知火さんルール説明をお願いします！』

『はいはい！この世に知らぬことなし！一文字流不知火ちゃんです！』

『袖ちゃん気に入ってるでしょ・・・それ・・・』

『えっ！？あれ！？白水くんいつの間に！？』

『今さっきです』

実はスキルを使った・・・「^{ノーブラン}無歩」っていう

行きたい場所をイメージして少し歩くと着くっていう方向音痴さんにはいいスキルだね

しかも少し歩くとだから使うだけでショートカットになるのだ

『さっ！袖ちゃん続き続き！』

『はいはい、ま、構えなくてもフツの騎馬戦だよ、ハチマキの奪い合い！ハチマキ取られたり騎馬が崩れて水中に落ちたりしたら失格です たっだしー！今のままじゃ下位チームに望みがなさすぎなのでここでクイズ番組的な救済ルール！』

『あれ？集めたハチマキの量ではなく質で決める的な』

『そうそう♪上位のチームほどポイントを高く設定します!! 具体的には現在1位のチームのハチマキは16ポイントですが! 最下位チームのハチマキは1ポイントにしかありません!』

『なるほど、つまり上位チームほど他チームから狙われやすいということですね?』

『そういうことー♪』

「カツ! 最後まで盛り上げてくれるじゃねーか、さすが俺の親友は考える事が違う! 大好きだぜー不知火ーっ!」

『イエー! あたしもあたしが大好きー!』

『俺はどうした善吉ちゃん!』

((((仲が良過ぎて気持ち悪過ぎ・・・!))))

すると会長ちゃんが善吉ちゃんの後頭部を殴る

「・・・貴様が誰を大好きだろうと自由だがしかし生徒会としての本分を見失うなよ人吉善吉!」

「ぼ・・・暴力をふるった・・・」

「細かいルールなど二の次だ! 倒すべき相手はそこにいる!」

『あれ? 袖ちゃん・・・競泳部の皆さんがこっち見てるよ?』

「んー? あれでしょあたしの狙いに気づいたとか?」

「狙いですか・・・?」

『？』

「これはねー生徒会と競泳部をぶつけるルールなの」

えーここはなんだっただけ・・・えーと

生徒会は競泳部のハチマキをゲットすると1位に

競泳部は生徒会のハチマキをゲットすると2位との差は15ポイント
その状態で2位が3位のハチマキをゲットしても競泳部との差は1
ポイント

つまり安全圏・・・あつなるほど・・・そのためにぶつけさせる挑
発ルールか・・・

ん？会長ちゃんが扇子で競泳部の方を指差してなんか言ってる・・・
なんつってんだろ・・・

あつなんか競泳部の喜界島が恐ろしい表情に・・・

『それではラストバトル！位置についてよーい・・・どんっ！！』

おっ！挑発が通じたのか生徒会と競泳部が組み合った！

互角？いや足場の問題か・・・何気にチームワークいいな競泳部
んー？またなんか言ってる・・・なんつってるか聞いてみるか！

「パートインクリス半身半技」発・動！これで耳を強化！
えーと・・・

「やはり貴様達はすさまじい敬服に値する私はすさまじい人間が大
好きだ！」

「ハッ！何よ今更、人のこと金の亡者呼ばわりしといてさ！」

「亡者ではないかここまでの貴様達の戦法はあまりに命知らずだ」「
命よりも金が欲しい」？よくもそんなことをいつてのけた！私はそ

の発言を許さない貴様達は金に溺れている！！」

「ぐっ……だ……黙れ！あんたなんか何がわかる！！お金がなかったせいであたしのお父さんは蒸発したぞ！お母さんは働き過ぎて身体を壊した！屋久島先輩のご家庭はお金がなかったから離散しちゃったし！種子島先輩の育った養護施設はお金がなくて潰れたぞ！誰がどー考えても！お金は命より大切じゃん！！あたしは命よりもお金が欲しい！！命知らずで大いに結構！お金のために死ねたら本望だ！お財布落としたら誰でも悲しむだろうけどあたし達が死んでも誰も悲しまないよ！！」

あっ！会長ちゃんが押し飛ばされた！しかも騎馬も崩れ——！善吉ちゃん何かを投げた！？

「甘えたことを抜かすな！たとえ貴様達が地獄のように不幸でもそんなことが命を粗末にしている理由になるか！！金が大切だと言う割りに随分高い買い物をしたものだな喜界島同級生、貴様は私の怒りを買った！」

！！……水の上に立って……いや！あれは！善吉ちゃんのヘルパー！？

「別に俺は勝敗とかどーでもいいんだけどなけど今のはさすがに俺も力チンときたぜ、だから珍しくけしかけてやる、やつちまえめだかちゃん！水中戦はともかくとして空中戦ならお前の十八番だ！」
ばん

そのまま会長ちゃんは喜界島のところまで一気にジャンプして！

騎馬から離す——えっ！？なんで……

なんでキスしてんの！！！？
いや凍っじゃねーよ！！

しかもいいこと言いながらハチマキとってるし・・・これは両者同時に着水・・・
でもヘルパーの上はまだ水上・・・つまり最後の攻防は有効・・・か生徒会はこれで1位に

ピピイッ

ここでホイッスル全競技コレで終了か・・・優勝は

『優勝は鍋島猫美率いる柔道部チーム！おめでとunggざいます！！』

は？

『えー柔道部チームは生徒会と競泳部がごちゃごちゃ戦っている間に！なんとその他の全チームを気付かれないようにこっそり撃破！合計103ポイント分のハチマキを獲得しぶっちぎりのトップと相成りました！！』

え~~~~~？そんなのアリい・・・？

まあその後増額した柔道部の部費はナベちゃんが適当に分配したらしい・・・

そして生徒会に後日行くと

「荒稼ぎに來ました無駄遣いしたら売り飛ばしますのですそのつもりで！」

なんか仲間になってる

「ちなみにレンタル料は1日320円！」

凜っ！

『「「驚きのお値段っ！」」』

第23話 「これだ！1、2、3！」（前書き）

あらすじ「主人公の立ち位置完全にヤム〇ヤ・・・」

第23話 「これだ！1、2、3！！」

やあ！前回までやってた水中運動会でまったく出番がなかった白水しみず
ゆみひこ
弓彦だよ！

実はここ数日の間色々あったんだけど

ある巨大な権力を持つものによって――

スキップ！！・・・されました

ちなみにその権力を持つてる人はさくし――（文字が汚れて上手く読めない）

「何をブツブツ言っているのだ？彦・・・」

『なんでもないよ会長ちゃん、で？何の話？』

「うむ、今、今日の各々の仕事を決めていたのだ」

「じゃあ俺は校舎の補強だな」

「では二年校舎の窓拭きですね」

「じゃああたしはポスター貼りにする」

「うむ、そうかでは、私は音楽室の防音設備の修復だ、彦は――

――

『うん、ちょっと待て！』

「どうしたのだ彦・・・？」

『何回言ったかわからんが・・・俺は生徒会じゃない！！』

「・・・え？そうだったけ？」

え！？善吉ちゃん！高ちゃん！もがちゃん！チラッと見るだけわかるよね！？

へ？もがちゃんって誰かって！？あれだよえーと・・・喜界・・・じ・・・ま？だよ！

『まあっというわけで俺は屋上で昼寝する！』

「ふむそうか残念だ」

何気に残念を強調したね・・・

『んじゃ！そういうことで』

そのまま俺は生徒会室を出て屋上に向かう

いやゝ屋上っていいね

風が気持ちいいし空気がおいしいし

そして・・・風が気持ちいいし！ん？はい！何も思いつかなくて適当です！

いやゝ作者の学校は屋上は入れないからなゝどや顔が出来るぜ！
といつても小説だからどや顔はわからな――

P i R i R i R i 電話か・・・相手は・・・会長ちゃんか

『はいどーもー白水弓彦ちゃんでーす！』

《緊急事態だ》

『はい？』

《風紀委員会が貴様らを狙っている》

『ほう』

《私では善吉たちを助けるので精一杯だ》

『だから自分の身は自分で守れと？』

《そうだ・・・》

『わかったあ』

ガチャッ！プープープー

『なるほど！今は2巻のあそこか・・・ん？』

なんか後ろに人の気配が・・・

『だれですか』

「ギクッ！」

『風紀委員の人すか？』

「そ、そうだ！お前をつぶす！！」

『そっか！じゃあ訓練と思って頑張るか』

つか人につぶすって言うってどういう教育を受けてきたんだ？

！3分後！

『あたんね！な』

「くっ！コノ！コノ！」

はーい今絶賛避けてるよ

ちなみに相手の武器は・・・何アレ？
なんかあれ手につける硬いもの・・・

今は「半身半技」^{バートインクリス}で目を強化して攻撃を見切ってるんだ！
でも目が疲れるし・・・やっぱお気に入りのアレだ・・・いや！

これだ！1、2、3！！「^{マインドクール}冷たい心」！！

これ気に入ってるんだよねー

これの真価を発揮してやるぜ！・・・次回に・・・

第23話 「これだ！1、2、3！」（後書き）

彦「無理矢理終わらせたね」

ちよつと作者の都合が悪くて・・・無理矢理終わらせました
少し短い・・・

次回はもうちよつと上手く書きます！

第24話 「俺、弱・・・」 (前書き)

あらずじ「屋上行ける学校って少なくてね？」

第24話 「俺、弱・・・」

「マインドクール
冷たい心」

作中で何回か使ったけど一応説明！・・・一言で

どんな事にもクールになれるスキル！！

一見「何の意味があんだよ」と、思うかもしれないが

実は違うのだ！

どんなことにもクールになれるということはどんな精神的ダメージも平気だし

どんな攻撃も冷静に攻撃を見れば冷静に対処できる！

どんな状態からでも冷静に次の動きに入れる！

そしてどんな相手でも動きを観察して次の攻撃がわかる

実は無敵のスキルなのだ！！

でも口調がクールになっちゃって解除したらなんか恥ずかしい——

ちなみにここまでの思考時間10秒

ちなみに攻撃をかわしながら説明してまゝす

というわけで発・動！！

・・・・・・

「このー!!」

風紀委員は遂に自棄になったようで拳を狙いも定めずに連続で振る俺はそれを冷静に観察して次の動きを予測しながらよけ続ける

「このやろー!!」

風紀委員は右足を使って蹴ろうとする

でもダメだな・・・

足を使うことは自らのバランスを崩すという事だ
そんな状態でも平気なのは足で戦うのに慣れてる善吉やめだかぐら
いだろう

俺はジャンプして右足の攻撃をかわし
俺の右足で風紀委員の左足首を蹴る

当然風紀委員はバランスを崩し倒れる

俺は倒れた風紀委員の両手を掴み

手に付いた物を無理矢理取る、そして

『俺の勝ちだな』

と、言う

「く・・・くそ!!」

『じゃあな・・・』

そのまま俺は屋上を去ろうとする

「・・・ふっ・・・ははははは！敵に背中を見せるなんておろか
——ぐはっ！」

うるさくて後ろから攻撃しようとしたから殴った

敵に背中を見せることが愚か？ちがうな見せても平気だから見せた
んだ

風紀委員が気絶したのを確認し俺は今度こそ屋上を去る

（生徒会室前）

どうしよう・・・生徒会室来たのはいいけど

この後ここ爆破されるじゃん！！！！

どーするべきか・・・

注 「マインドクール冷たい心」は解除してます

ガラッ

へ？

「何をしている？彦」

『あ・・・会長ちゃん・・・』

「ちようど呼ぼうと思っていたのだ、入れ！」

ぎゃああああ危険地帯に入らされてしまった――

しかもその30秒後

会長ちゃんの弾いたスーパーボールが顔面に直撃した

その直後

パチパチパチパチパチ

「いやーお見事お見事！一年以上そのテクで――ん？てめえは・・・」

『どーも初めまして白水弓彦（しみずゆまひこ）です雲仙先輩』

「あ？なんでオレの名前知ってたんだ？」

『え！？えーと・・・』

「ケツ！まあいい」

自分で聞いたくせに・・・

「ま、でも正体が割れたらそれで終わりな子供だましろ」

そう言つて雲仙先輩は袖から大量のスーパーボールを出す

あれ？やばくね？このままじゃ爆発する！！

「・・・何このヒネてそーな子供全然可愛くないんだけど」

（（喜界島さん空気読んで！！））

（もがちゃん空気読んでよ・・・）

はっ！よくかんがえたら会長ちゃんに伝えれば助かるんじゃー！！

『会長ちゃん！これ火薬だ——』

「うるせえ！」

『ブツ！！』

スーパーボールを脳天に二つぶつかる

その痛みで意識が途切れかける

俺、弱・・・

そして意識がハッキリしてくると

復活早や・・・約1、2分かな・・・

「貴様達離れる！さっきこやつがバラ撒いたのはスーパーボールではない！火薬玉だ！！」

「おつとバレたかい？ダメだなーオレって本当にダメだ！手品下手過ぎ！だがまあ遅い仕込みはギリギリ終わってる」

えっ！？嘘！！もうここ！？くそっ！こっとなったらヤケだ！！

『会長ちゃん！会長ちゃんは爆発を弱めて！善吉ちゃん達は任せて

「!!」

「!!・・・わかった任せたぞ!!」

そして雲仙先輩は取り出したマッチに火をつけ

爆発を起こす

第25話 「私が本気で殴っても!」 (前書き)

あらすじ「主人公は弱さもヤム○ヤ並」

第25話 「私が本気で殴っても!」

自分の上にある瓦礫ほ蹴っ飛ばし出てくる雲仙冥利

「ケツ! 風紀委員会特服『スノーホワイト白虎』——ダンプにはねられてもへっちゃらだっつー触れ込みの対圧繊維で縫製された最新科学の産物だ、ド深海で作業する潜水艦とかで使われてる素材なんだが重くて動きづらい難点だな!……しかし」

雲仙は爆破された生徒会室を見渡す

「思ったより被害が小せえな、そりゃ校舎全壊とまではいかなくてもこの辺一带消えてなくなってもよかつたはずなんだが」

すると雲仙は足元にある火薬玉を見つける

（不発弾……? いやオレが管理してんだぜそれはありえねえ……じゃあ?）

雲仙の頭に着火する直前を思い出し確信する

「（ああ、なるほどね、あの女手近にあった花瓶の水をぶち撒けて着火直前に火薬玉をいくつか濡らしやがったのか）火いつける前に水びたしにされちゃー不発にもなるわな、そして窓ガラスが不自然な割れ方をしているぞ、どうやら溶ける前にすでに割れてたみてーだな、爆破の瞬間蹴り出された火薬玉も相当数あるってわけだ、抜け目ねっつーのか如才ねっつーのか、一瞬の判断でよくそこまで動けるもんだぜ、けどまあそんなの所詮は焼け石に水——」

爆風が晴れてきて雲仙は人影をみる

そこにはボロボロの生徒会メンバーとそれ以上にボロボロの白水弓彦がいた

「なっ・・・何イ・・・！？黒神！テメー一体何をした！？」

『簡単なことですよ雲仙先輩・・・』

「て、てめ！白水！！てめーそんな怪我してなんで生きてる！？」

雲仙先輩がおどろくほど俺は大怪我している

『爆発の恐ろしさは熱より爆風ですからね、でも爆風を受けなければ大したことはない、だから俺は善吉ちゃんと高ちゃんともがちゃんを壁際に押して俺が盾になって爆風が届かないようにしたんですよまあ会長ちゃん爆発を弱めていたからモロに喰らいましたけど』

「・・・！！？（簡単に言ってくれるが何が簡単なもんかよ！、しかも二人共爆発をモロに喰らったってことじゃねーかよ！部屋一つ吹き飛んでんだぞ！？こいつら本気の本気で正気じゃねー！！）ケケケケケ！いや本当スゲーわその聖者っぷり気持ち悪いーっ！テメーらのガンコな信念にオレはちよっぴり感動すらしてきただぜー！！」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「ケケケ！そんでアレだろ？この期に及んでもどうやらテメーは争う理由なんかねーって言うんだろ？仲間もオレも傷つけずに済んで一件落着！めでたしめでたしハッピーエンドってことになるんだよな

「――」

「うるさい」

「!」

「……哀れなことだ、貴様もかつては人の善性を信仰する心優しき美少年だったに決まっている、情状酌量に値するだけのきつかけがあつてそのような残虐無比な性格を帯びてしまったとしか考えられん

しかし!だからと言って私は貴様を許さない!!」

会長ちゃんの放つ殺気に雲仙先輩は後ずさる

「雲仙二年生貴様の言う通りだ私と貴様はそっくりだよ私も貴様と同じで自分を正しいと思ったことなど一度もない、もっといい方法はなかったか、ちゃんと他人の役に立てているか、起こりうるすべての可能性を考えたか、誰かの悲しみを見落としてないか、気付かぬうちに易きに流されていないか、人を助けることに慣れてしまつてはいないか、いつだって迷つてるし、いつだって怖い、私は正しくないかない、ただ、正しくあるうとしているだけだ!!」

「?わかんねーよ何言つてんだかおんなじじゃねーかそんなの」

「わからんか?私には貴様の言うような大層な信念などないと言つておるのだ少なくとも友達を危険な目に遭わせてまで貫きたい信念など私にはない!!」

一步会長ちゃんが雲仙先輩に近づく

「私の聖者っぷりが気に入らないんだって?雲仙二年生、いいだろ

うならばがっかりさせてやろう、私が怒りに任せて暴れてしまおうなただのくだらない人間だということを教えてやろう!!」

「人吉くんめだかさんがあの状態になるのはいつ以来だ？」

「中一の夏休み以来ですよだから三年振りですか」

「そうかい、そうだな、俺もあの頃はめだかさんのことを血も涙もない理想主義者だと思っていたよ」

「……黒神めだかの真骨頂その？『乱神モード』！
こうなったらもう俺でも止められねーよ雲仙お前終わったぜ」

「……ケケケ！人のコト勝手に終わらせてんじゃねーぞ、ボケ！！乱神だろーが魔神だろーが火山の前じゃ消し炭だぜ！！」

雲仙先輩は大量のスーパーボールを取り出し会長ちゃんに向かって飛ぶ

それを会長ちゃんスノーホワイトは拳を雲仙先輩の腹に喰らわす

あまりの威力に『白虎』でも威力を吸収しきれず雲仙先輩は吐血する

「ダンプにはねられてもへっちゃらな制服だって？それを聞いて安心したつまり三発までなら大丈夫ということだよな、私が本気で殴っても！！」

第26話 「やり過ぎだ」(前書き)

あらすじ「ダンプの3分の1」会長ちゃんのパンチ」

今回ナレーションになったりモノローグになったりします

第26話 「やり過ぎだ」

めだかに殴られた雲仙は数メートル飛ばされ校舎にぶつかる

「たいしてダメージがあるとは思えないがそのまま立ち上がれない
振りをしておけ、今ならまだ許してやれるかもしれない」

フラフラになりながらも雲仙は立ち上がる

「・・・ケケケ冗談！痛くも力ユクもねーっつーの！ノーダメージ
ジだよボケ！」

「そうかあくまでも戦争を選ぶか私も同じ気持ちだが、ならば私の
理性がわずかでも残っておるうちに忠告しておこう、空手・柔道・
合気道・日本拳法・ジークンドー・骨法・ムエタイ——私はあり
とあらゆる格闘技の指南を受けておるがその技術を貴様相手に使う
ことはない、何故ならそれらは人間が練り上げた崇高なる技術だか
らだ、衝動的な怒りに任せて使うようなものでは決していない
だから私はただの衝動的な怒りに任せて暴力に訴え人間ではなく獣
のように貴様を撃つ——」

「・・・ケツ、なーに言ってるやがる！そんなに言葉にビビられる
オレだとも思ってたのか！？（とは言え挑発に乗って屋外に飛び
出してきちゃったのはマズかったな、スーパーボールにしろ火薬玉
にしろオレの武器は基本屋内用！ひらけた場所じゃ威力も効果も半
減だ！ここは一旦詫び入れて体制整えてから出直すって手もねーじ
やねーんだが——）」

雲仙の頭に風紀委員達の顔が浮かぶ

「（・・・そうはいかねよな、こんなオレでも風紀委員会の看板背負っちゃまってんだ、風紀委員会は正義！ゆえにテメーを今この場所に取り締らねえ理由がねえ！！）いいだろう！テメーが獣のように戦うのなら！俺は人間のように戦ってやる！テメーの大好きな！俺の大嫌いな人間のようにな！！」

そして雲仙はめだかに向かって飛ぶ、それをめだかは意にも介さず再び雲仙の腹に拳を喰らわせる

雲仙はそのまま破壊された生徒会室に吹き飛ぶ

しかし雲仙はこれをあえて喰らったようにも見える

何かを企んでいることをめだかは察しそれでもとどめを刺すために歩を進める

そこに善吉が声をかける

「めっ・・・めだかちゃんっ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・私の主義に巻き込んで悪かったな貴様達、あとで腕章を返してくれこれから私は一人でやっていくことにするよ」

（――！まずい・・・！こりやその？とか言ってる場合じゃねえ！このままじゃめだかちゃんがどこか遠くに行っちゃまう！！）

『・・・・・・・・どうする？善吉・・・ち・・・やん』

彦が倒れる

それもそうだスキルを持っているとはいえ身体能力は普通だノーマル
全身を大やけどをすれば気絶ぐらいするだろう

「彦!!」

「白水クン!？」

「しっかりして!」

〈数分後〉

意識がハッキリしてくる

鳴り響く轟音によって

その音は校舎を引き摺る音のように聞こえる

いや本当に引き摺ってるんだろう

『善吉ちゃん・・・』

「彦!? 起きたか! 大丈夫か!？」

『大丈夫大丈夫・・・会長ちゃんは?』

「あそこだ」

俺は善吉ちゃんが指差した方向を見る

『・・・すげ・・・けど怖え・・・』

俺が見たのは一言で言うと「化物」バケモノだ

「怖くて当然だ、あれが黒神めだかだ、人格をはがされてみればあの通りただの力の塊だ、さながら暴風雨のごとく周囲を根こそぎにするだけだ」

そして善吉ちゃんはどう続ける

「喜界島、阿久根先輩、彦、もしも引き際があるとすると多分ここだぜ、めだかちゃんのそばにいればこれからもずっとこんなことが続く、あいつにこれ以上巻き込まれたくないんだったら、あいつの言う通り確かに今が生徒会の辞め時だ」

『「！」「」』

「防御は崩され、攻撃は通じずも、切り札はまるで切れやしねえ、情けねえ限りだが、オレにはもう何も残っちゃいねえ、しかしな黒神それでもオレはテメーに負けちゃねーんだ、なぜだかわかるかい？なぜならオレはテメーにちつとも心を動かされてねえからだ！テメーはオレを改心させることができなかった！それはテメーにとっちゃあ敗北だろ？テメーは確かにオレより強かった、ただそれだけだそれだけでしかねえ、正しかったわけでも優れていたわけでもねえ、他のすべてを手折られようとオレは信念を曲げやしねえ、オレは明日からも変わらず言い続けるぜ、オレは人間が大嫌いだ！！」

めだかは攻撃の態勢に入りながらこう言う

「そうか私は人間が好きだ、貴様は改心しないでいいよ、貴様に明日は来ないからな」

そのままめだかは拳を振りぬく

「やめろめだかちゃん、やり過ぎだ」

それを

俺、善吉ちゃん、高ちゃん、もがちゃんで止める

「離せ貴様達、巻き込まれたいのか」

「うんそくだよ、あたし達は黒神さんに巻き込まれたいんだ!」

もがちゃん

「めだかさんになんと言われようと俺達は生徒会を辞めません」

高ちゃん

「めだかちゃん」

善吉ちゃん

『「俺達はもう二度とお前をひとりにはしないよ」』

俺と善吉ちゃん

すると会長ちゃんの髪や雰囲気は元に戻る

そして拳を引っ込めて会長ちゃんと言う

「雲仙二年生、貴様生徒会に入らないか?」

『「「「!?!?!」」」』

「あ？」

「もとより副会長には私に敵対的な者に就いてほしかったのだ、不知火には断られてしまったが、考えてみればここまで私と張り合った貴様は中々に適任ではないか！」

いつも通りの会長ちゃんだ・・・やべ・・・もう限界・・・

俺は誰にも気づかれなくらい静かに倒れた

（理事長室）

そこには見知らぬ老人と不知火がいた

「雲仙くんがしばらく戦線離脱ですか、困りましたねえ『十三組の十三人』は一人でも欠けちゃあダメなのに、このままでは私の計画が破綻してしまいますよ、どうすればいいと思います？袖ちゃん」

「どーもこーも！別に悩む必要なんかないっておじいちゃん、いやさ箱庭学園理事長不知火袴総帥！困った時は迷わず選ばず、目安箱に投書すればいいんだよ」

第27話 「フラスコ計画始動」(前書き)

あらずじ「主人公がカッコいいこと言っている!!!!?」

第27話 「フラスコ計画始動」

（理事長室）

「雲仙くんとの小競り合いは大変でしたね黒神さん、理事会も彼の正義には手を焼いていたものですから正直言つて助かりましたよ、やりすぎ箱庭学園理事長として正式にお礼を言わせてください」

今喋つたのは自分で言つて通り箱庭学園の理事長だ、名は不知火袴

「礼にはまったく及びませんよ不知火理事長、それより私としてはお孫さんの制御をお願いしたいものですな、恥ずかしながら彼女にはしてやられっぱなしでしてね」

こちらは原作の主人公黒神めだかだ、彼女とは不知火半袖の事だ

「ははは、無茶言わないでくださいよ黒神さん、袖ちゃんをコントロールできる人間なんて精々キミの幼なじみの人吉くんくらいですよ」

「・・・・・・・・・・確かに」

理事長も半袖には困つてゐるようだ

「さて・・・それでは本題に入りましょうか目安箱に投書をしてまで君にこうして足を運んでもらつたのは他でもありません、黒神めだかさん、君に折り入つてお願いしたい事がありますね」

その言い方からしてめだかは目安箱の投書によって来たのだろう

「それは怖いですなああなたはあのお孫さんのご祖父でいらっしゃる、どんな無理難題をふっかけられることやら」

「まあそう構えないください、なあと簡単なお願いなんです、実は雲仙くんは風紀委員長としての活動とは別に私の主宰するプロジェクトに参加してくれていましてね、ただ彼は今度のことでしばらく静養しなければなりません、そこで黒神さんに彼の代役をつとめていただきたいのです」

「プロジェクト……ですか？」

理事長はにつこりしながら答える

「私は便宜上それを『フラスコ計画』と呼んでいます」

「フラスコ計画……ですか……」

「黒神さん君はどうして自分が優秀なのか——疑問に思ったことはありませんか？」

「質問の意味をはかりかねますね、そもそも私は自分を優秀などとうぬばれたことを思っておりません」

「ははは謙遜する事はありませんよ、隠さなくたっていいんです、君は明らかに異常なんですから！足捌きで分身する、新聞の内容を細大漏らさず記憶する、フルマラソンを二時間フラットで駆け抜ける、獰猛な獣をひとにらみで屈服させる、関数計算を暗算でする、十代において赤帯を巻く、書の道を三カ月で極める、水の上に立つ、校舎を素手で破壊する、どれひとつとっても人間には到底不可能な

「行いですが、通常では勿論！特例であろうとなしえない！完全に異常
の領域です！！」

「これは買いかぶられてしまったものですな、私の為すことなど恵
まれた生まれにおけるただの鍛錬の結果に過ぎませんよ」

「そうですね優秀な人間ほど己の優秀さを努力や運や環境のせい
にしたがるものです、まるで言い訳でもするみたいだね、では、黒神
さん、ここでひとつ老人の実験に付き合ってくださいませんか？」

すると理事長はグラスに入ったサイコロを取り出す

「振ってみてください」

「わかりました」

めだかは八つのサイコロを振る

そして結果は

八つ全てのサイコロが積み重なる

「すみません昔からそうなんです私がサイコロをまとめて振ると、
なぜか積み重なってしまうのです」

「……いえそれでいいんです、それでこそ君を誘う意味がある！
フラスコ計画の定員は十三名、十三組の中から更に選ばれた『十
三組の十三人』が計画を進めています」

「不知火理事長お話はそこまで結構です、申し訳ありませんが正式にお断りさせてください、失礼します」

そのままめだかは理事長室から出る

「フウ、強い子だ、強い強い、強過ぎて、弱点が丸わかりですね

で、君たちはどう思いました？」

突如、理事長の後ろに6人の男女が現れる

「僕には理事長が言うほど大した奴には見えませんでしたけどね、サイコロ占いの結果には驚かされましたが、彼女、僕達がここにいるのも気付いた様子はありませんでしたし」

宗像形 所属 三年十三組 血液型 A B型 験体名 『ラストカーペ枯れた樹海』

「いやあ俺の見たところ気付いた上で無視してたっつー感じだぜえありゃ、とりあえず五回くらい殺してみようと思ったけど全部失敗しちゃったもん」

高千穂仕種 所属 三年十三組 血液型 A B型 験体名 『ハードラック棘毛布』

「いずれにしてもあの子が雲仙くんに勝てたのはただのマグレだと私は思うよ、まあでも私は好きだよああいう子」

古賀いたみ 所属 二年十三組 血液型 A B型 験体名 『ベス骨折トペイン』

り指切り』

「私は意見を有しない、思うことなど何も無い」

名瀬天歌 イト 所属 二年十三組 血液型 AB型 験体名 『黒い包帯』 ブラックホウ

「いいんじゃない？あれなら人数合わせくらいにはなるでしょ、結局ボクと王土がいればそれでフラスコ計画はなりたつんだし」

行橋未造 所属 三年十三組 血液型 AB型 験体名 『狭き門』 ラベットラベリンズ

「うむあれだけの美貌だ、俺の視界に存在する事を許してやってもよからう」

都城王土 所属 三年十三組 血液型 AB型 験体名 『創帝』 クリエイト

「ふふふ、いやはや、君達にかかつちゃあ化物生徒会長も形無しですな」

そこに古賀が話しかける

「ただで理事長さん私としてはあの子が計画に参加してくれたらいーなーって思うけど、誘いはつれなく断られちゃったじゃん、どうすんの？」

「心配いりませんよ古賀さん、もう二人候補がいます」

「理事長が目をつけるということは少なくとも僕達に匹敵するほどの異常なんでしょうね」 アフターマル

「ええ、面白い事にその人物は異常アブノーマルを何個か持つてゐるらしいのですよ
もう一人はデータが少なくいまいちですね」

「ふは！なるほど一人は奴か」

「ん？あいつ？誰の事だい王土・・・？」

「白水弓彦しらいづみひこだ」

「おや？知っているのですか・・・しかし彼は今入院中と聞きましたかね」

「もう一人は誰ですか？」

「先ほども言ったとおり情報は少ないです」

「名前は？」

「□□□です」

第27話 「フラスコ計画始動」(後書き)

主人公が登場しないまま一話が終わってしまった・・・

もう一人の人物とはキャラの設定の募集で送ってもらった者を使います

名前が一番悩む・・・

第28話 「お断りします！」（前書き）

あらすじ「ついに主人公登場ナシ!!!」

今回は少し短めです

第28話 「お断りします！」

やあ！読者の皆さん！もう覚えたと思うけど白水弓彦しるすゆみひこだよ！

今、俺は退院したから家に帰るとこだよ！えっ！？「怪我もつ治ったの？」って？何のことかな

そんなわけで受付をすませて家に向かう途中に

「久しぶりだな」

都城王土・・・いやファラオが現れた

「いや白水くん・・・まだファラオって呼んでるの？」

『行橋先輩・・・心読まないくださいよ』

「えへへごめんごめん」

『で、なんか用すか？久々の家のベッドで気持ちよく寝ようと思っただのに』

「理事長が呼びだ」

『へ？』

（理事長室）

「すみませんねえ、白水くん、退院直後に呼んでしまって」

『お気になさらず理事長、それで何のご用で?』

敬語つてむずかし〜しかも行橋先輩とフラオどっか行っちゃうし
ん?理事長室、理事長に呼ばれた、退院直後〓急用
・・・・・・なるほどね

「ええ実は私の主宰するあるプロジェクトに参加してほしいのです」
『お断りします!』

隣っ！

おっなんか凜っつて出そうとしたらだせた・・・字ちがくね?
なんだよ少し直したら「隣^{となり}っ!」じゃねーか!!
・・・さて話を戻そう・・・

「な、なぜですか?まだ話してもいけませんよ」
『なーに簡単な事です』

俺は理事長の座ってるソファの後ろを指差す

『そこに人の気配がするんですよ、盗み聞きしてる人たちがいると
か気分悪い・・・』

「そうですか・・・皆さん出てきていいですよ」
すると4人の男女が現れる

・・・どうやって隠れてたんだ？

「へえ、俺たちに気付くとかおもしれー奴だな、あつ俺は高千穂仕種ってんだ」

『どーも、白水弓彦です』

「僕は宗像形・・・都城が目をつけるだけあるね」

『何故刀を持ってるんですか？』

「私は古賀いたみ、君となら仲良くなれそうな気がするよ」

『そうですか俺もそう思います（露出狂だよ・・・）』

「私は名瀬天歌」

『よろしくお願いします』

ファラオと行橋先輩はいないのか・・・

『どーやらこの先輩方がそのプロジェクトのメンバーのようですね』
「そうです、フラスコ計画それがプロジェクトの名です」

『フラスコ計画ですか・・・』

やっぱここか・・・

「計画参加者にはそれなりの報酬がありますが？」
『参加したいのは山々なんですけど・・・お断りしますよ』

「そうですか・・・残念ですね」

『他に候補はいるでしょ黒神めだかとか』

「いえいえ黒神さんには断られてしましまして」

『他に候補はいないんですか?』

まあいるわけ――

「一人います」

え!?!いの!?!原作じゃいなかったはずじゃ・・・

『名前はなんですか?』

「□□□□です」

『!?!!』

「どうしました?」

なんで!なんで!?!あいつが!?!!?

く回想く

これは俺が元の世界で中学3年の時

第28話 「お断りします！」（後書き）

もう一人の候補の名前は決まっていなかったかじゃないですよ！！
あえて隠してるだけですよ！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2602x/>

普通だけど異常で過負荷な俺

2011年10月26日15時03分発行